清末小説 第30号 2007.12.1

林訳シェイクスピア冤罪事件

――林紓を罵る快楽　番外編

樽 本 照 雄

林紓が漢訳したシェイクスピア（William　Shakespeare，1564-1616）作品について、大きな「欠陥」があると今まで言われてきた。だが、それは事実無根である。ゆえに冤罪事件だ。私は、本稿において証拠を提出して論証する。

そもそも、林紓の冤罪事件など、読者は聞いたことがないはずだ。私が本稿ではじめて明らかにすることだからである。この冤罪事件は、研究者のだれひとりとして、いままで指摘したことがない。冤罪事件だという認識すらない。従来の林紓評価を、その根底から覆すものになるはずだ。

まず、順序として、林紓の翻訳に関して従来からある見方、認識について説明することからはじめる。

林紓は、外国語を理解しなかった。外国語ができる人物と組み、口述翻訳をもとにして林紓が古文で筆記する。共同作業で外国文学の翻訳を行なった。有名なことだ。翻訳形態のひとつだということができる。

ただし、林訳小説について研究者が説明するばあい、必ずといっていいほどあげる負の側面、いわゆる欠陥がある。彼の漢訳を最終的に正に評価するにせよ負に評価するにせよ、まず、前提として翻訳そのものに大きな欠陥があると認識するのだ。

林紓を研究する林薇がその著書『百年沈浮――林紓研究綜述』（1990）でまとめているから、それによって紹介しよう。

1　林訳小説の欠陥

欠陥は、箇条書きになっている。内容を要約して示す。

１．翻訳したものが１流の名著とは限らない。２３流の、はなはだしくは価値のない多くの作品を翻訳した。恋愛、探偵などの通俗小説をいう。

２．小説と戯曲を混同した。たとえばシェイクスピア、イプセンの脚本（『ヘンリー４世［亨利第四］』、『幽霊［群鬼］』など）を小説の形式で出し、見る影もなく変えてしまった。

３．児童の読物を筆記小説にしてしまった。たとえば『詩人解頤語』、『秋灯譚屑』など。

４．原作を任意に削除した。たとえば『ドン・キホーテ』を『魔侠伝』に、『九十三年』を『双雄義死録』に翻訳したが、薄い小冊子に変えてしまった。

５．誤訳が多い。*1

１にいう価値のない作品とは、たとえばライダー・ハガード、コナン・ドイルの著作を指す。私がそういっているわけではない。中国では、従来からそういうことになっている。原作評価については、私にいわせれば意見が分かれるところだ。あくまでも、中国では、ということを念頭においていただきたい。

２もよく知られている。林紓は、シェイクスピアの戯曲を小説に書きかえた。本稿は、これを取り上げて問題にする。これこそが、林紓の冤罪事件にほかならない。

３と４は、原作内容の要約化とでも言いかえることができる。

５の誤訳は、翻訳にはつきものであり林訳だけとは限らない。

これらをひとまとめにして、林訳は、原作に忠実ではない、ということになる。

林薇は別の箇所において、『魔侠伝』『梅孽』『双雄義死録』『九三年』およびシェイクスピアの作品をわざわざ取り上げ、次のように書いている。

原本の選択がよくなく、書きかえが多く、省略も過多で、成功しているとはいえない。しかし、結局のところ国民にこれらの世界名著を最初に紹介したわけで、読者の目を十分に満足させたのである。*2

林薇は、翻訳史上においてはたした林紓の役割をもとより高く評価している。だが、その彼女にして林訳の欠陥についての見解を紹介するだけで反対していない。また、異論を提出してもいない。それどころか、上に引用したように、専門家であ

る林薇も、林訳の欠陥については認めているのだ。当然ながら、冤罪事件が存在するなどとはまったく考えてはいない。

林薇のこの著作が発表された1990年の中国において、欠陥についての認識は定説となっていた。現在も変わりはない。この定説が立論の前提にもなり、記述が展開していく。

長い年月を経て徐々に形成され定着した説かといえば、そうではない。1918年には、劉半農によって基本的な観点が、すでに提出されている。林訳小説の欠陥理由である。

劉半農による批判――提起

劉半農の林訳批判は、『新青年』第４巻第３号（1918.3.15）の「文学革命之反響」欄に掲載された。

劉半農と銭玄同のふたりで実行した「自作自演の論争」、俗にいえば「なれあい芝居」、私が見るところの「八百長試合」である。

文学革命派は批判をくりひろげていたが、相手側は誰も相手にしない。そこで、林紓を古文派の首領と見定めた。彼らの攻撃目標に林紓が選ばれた、というだけのことだ。逆にいえば、林紓が外国文学を古文で翻訳して当時の文芸界に多大の影響力を持っていたことの証拠でもある。

林紓を誘い出すために一芝居打った。銭玄同が架空の王敬軒になりすまし、古文派の林紓を絶賛する。それが「王敬軒君来信」だ。劉半農が逐一反論して林紓批判をくりひろげる（もとは無題。「答覆王敬軒先生」とよんでおく）。そういう形になるように筋書きを定めた。文学革命派が理論的に勝利するよう、最初から仕組んである。

わざわざ文章を捏造し論争を演出しなければならなかったほどに、銭玄同、劉半農ら文学革命派は手詰まり状態だったことがわかる。

問題は、劉が行なった林訳批判の中身なのだ。

劉半農は、大要次のように述べる。

林紓が翻訳した小説は「娯楽本［閑書］」である。少しの文学的意味もない。

理由１：原稿の選択がよくない。価値のない作品を翻訳している。

理由２：誤りが多すぎる。原本と対照すると削り改め原本の面目を失っている。

理由３：林氏がやっているのは「娯楽本」であって、文学意味のあるものでは

ない。著書と訳書は根本的に異なる。314-315頁

劉半農が林訳の欠陥理由としてあげたシェイクスピアに関する例は、あまりにも有名だろう。

すなわち、林訳『吟辺燕語』（1904）は、シェイクスピアの戯曲を小説に書きかえて翻訳してしまった。劉半農はこう指摘した。戯曲と小説の区別もつかないデタラメな翻訳だといっているのと同じことだ*3。

劉半農の林紓批判は、最初の時点で根本的なところで間違っている。ここではっきり書いておく。

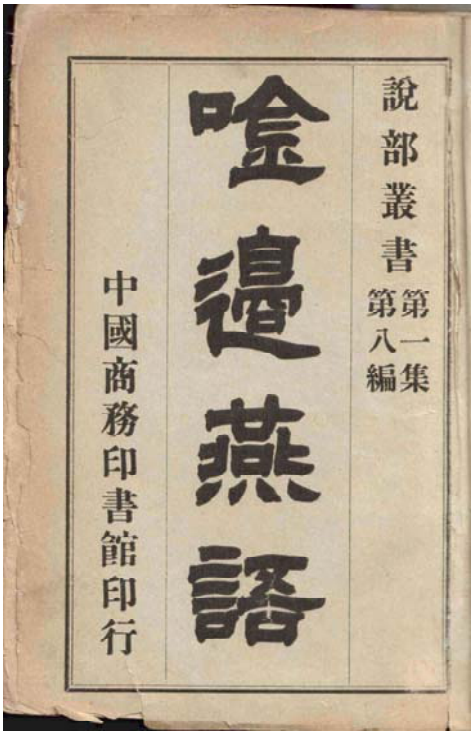
劉が証拠としてあげた林紓＋魏易訳『吟辺燕語』は、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』が原作だ。その事実を劉半農は知らなかった。彼は、林紓が、シェイクスピアの原作から直接翻訳し、その際、戯曲を小説に変形させたと考えた。誤解だ。つまり、劉半農は間違いに基づいて林紓を批判したことになる。（彼が、もし、原作がラム姉弟のものであると知ったうえで林紓を批判したとしたら、悪質である）

『吟辺燕語』について、林紓が脚本を小説化*4したというのは確かに誤認だった。今から見れば、劉半農の批判は無効であるのは明らかだ。

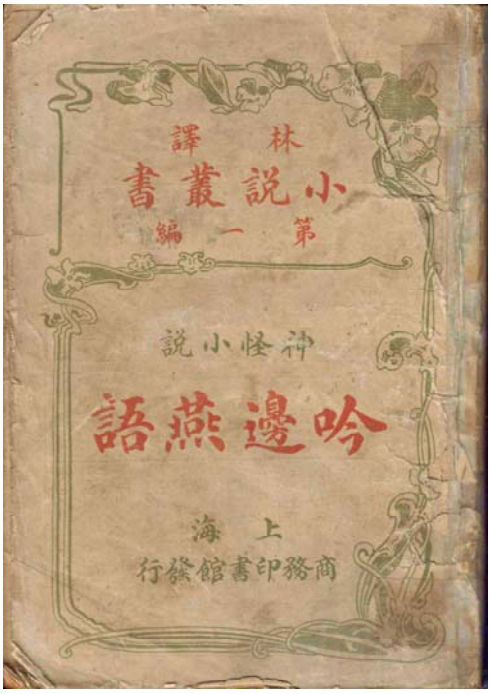
だが、当時、それを指摘する人はいなかった。劉半農の誤りをいって林紓を弁護する人はあらわれなかったのだ。そればかりか、戯曲の小説化という部分のみがひとり歩きしはじめる。それを導いた人がいたからだ。シェイクスピアの戯曲全体に適用され、現在にいたるまで訂正されることがない。定説となっている。

銭玄同と劉半農が火をつけた林紓批判が、以後、継続して行なわれることになった。劉の文章は、文学革命の旗を掲げて旧文人を批判した代表的なものとしてのちの資料集に収録される。各種文学史においても言及されることになる。彼の論文が、ある種の権威をともなって読まれたのも無理はない。林訳作品に関する負の評価がついてまわるのだ。

総合的に負の評価に傾きながら、それでも、時折、正の方向にも振れていく。多くの欠陥を抱えてはいるが、当時の文芸界に与えた影響は無視できない。これが正の評価だ。いや、そうかもしれないが、林訳小説は根本のところに欠陥を抱えている。評価は簡単に負にもどる。正負のどちらかを重視するかによって、その評価は論者により微妙に変化する。この変形が現在にいたるまで継続されているといってもいい。その際、林訳の欠陥についての定説は、定説ゆえに揺れることがない。こ


說部叢書 第一集 第八編
吟邊燕語
中國商務印書館印行

說部叢書
第八編 初集
吟邊燕語
神怪小說
上海商務印書館發行


林譯小說叢書
第一編
神怪小說
吟邊燕語
上海
商務印書館發行

林译小说丛书
吟边燕语
〔英〕兰姆 著
商务印书馆

『吟辺燕語』各種

れが、林訳評価の基本構造である。

劉半農が指摘した林訳の欠陥は、彼の誤解にもとづいて提出されたものであった。しかし、『新青年』の次号に掲載された胡適の文章が、大筋において林訳の欠陥を追認した。

胡適による批判――追認

胡適は、西洋文学の翻訳状況について不満を感じ、新たな提案を行なった。そのなかのひとつが、白話を使えという主張だ。原作が韻文の戯曲であれ、白話の散文に翻訳すべきた、という。その理由は、古文で翻訳すると原文のよさは必ず失われるからだ、とのべる。その例を林紓の翻訳で示している。

○胡適「建設的文学革命論」『新青年』第４巻第４号1918.4.15。305-306頁（該当頁数を示す。以下同じ）

「古文を用いて翻訳すると、必ず原文のよさを失ってしまう。たとえば林琴南の「其女珠，其母下之」というのは早くからお笑いぐさになっているから論じる必要もない。数日前、探偵小説『圓室案』を読むと、そこには探偵が「かっとなって大いに怒り、袖を払って立ち上がった［勃然大怒，払袖而起］」と書いてある。この探偵は、ケンブリッジ大学の広袖の制服を着ていたのであろうか！――このように訳すなら、訳さない方がましだ。また、林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳している！これは、本当にシェイクスピアにとっての大罪人であり、その罪は『圓室案』の訳者を上回るものだ」

『圓室案』の訳者は、商務印書館編訳所となっている。林紓ではない。

胡適は、作中で外国人であるはずの探偵が中国人の立ち居振る舞いをすることに訳したのは間違いだ、と批判する。そうかもしれない。だが、訳者にしてみれば、決まり切った表現の方が、中国人読者には理解しやすいと考えたのではないか。小説の大筋に関係のない部分であれば、それに類することはありうる。

問題であるのは、林紓が訳して表現したという「其女珠，其母下之」の方だ。「お笑いぐさ」だと胡適は切って捨てる。だが、この断片を見て、どこがお笑いなのか、私にはわからない。だいたい、中国語の意味が伝わってこない。前後の文脈もなく、この７文字を見るだけでその意味するところを理解せよ、というのは無理ではないか。だが、胡適の書き方からすると、『新青年』の読者であれば、すぐに了解する事柄であるらしい。

さがせば、確かに先例がある。胡適の文章の１年前のことだ。同じ『新青年』に掲載された劉半儂「我之文学改良観」（第３巻第３号1917.5.1）にそれがある。胡適は、これを踏まえているから余分な説明をしていない。劉の原文を示す。

> 近人某氏訳西文小説、有『其女珠、其母下之』之句。以珠字代『胞珠』、転作『孕』字解。以下字作『堕胎』解、吾恐無論何人、必不能不観上下文而能明白其意者。……7頁

「近人某氏」とは、林紓を指す。なぜそれがわかるかといえば、引用した字句が彼の翻訳した『巴黎茶花女遺事』に見えるからだ。

劉半農は、つぎのように説明する。「珠」は「胞珠」から転じて「妊娠する」だし、「下」は「堕胎する」を意味する。そうすると、みなが物笑いにしたという箇所は「その娘は妊娠し、母親はそれを堕胎させた」という意味になるらしい。劉半農は、「誰でも上下の文章を見なければならず、そうしてこそその意味を理解することができるだろう」と書いている。「お笑いぐさ」だと表現したのは、前後関係がなければ、誰も理解できないことを意味するのだった。

当時、中国の知識人に大いに歓迎された漢訳『椿姫』の最初の部分に、その語句はある。小説の話し手が、今では年老いたある娼婦について説明する箇所だ。その娼婦の若いころに勝るとも劣らない器量よしの娘ルイズが身ごもり、母親の命令で堕胎の手術を受けたのち、結局、死亡してしまう。林紓の漢訳を見ると上に引用したそのままの箇所はなく、「女接所歓，嬲，而其母下之」となっている。この下部４文字は、劉半農の書くとおりだ。しかし、上半分が異なる。林訳の「嬲」が妊娠するという意味だ。この文字について、もしかすると劉半農が勘違いしたのかもしれない。そうであれば（林紓の原文と一致しないからそうに違いない）、誤解による批判になるのではなかろうか。少なくとも、あげた例文の上半分については、誤解だといっておく*5。

それはさておき、胡適が書いた「これは、本当にシェイクスピアにとっての大罪人［這真是 Shakespeare 的大罪人」であるという箇所に注目していただきたい。もとの戯曲を小説化した、といって林紓を「大罪人」だと断定している*6。

劉半農が最初に批判して、胡適が追認した。

さらに後を追うのが鄭振鐸だ。彼は、劉半農の誤解をひそかに修正する。しかも、

胡適の追認を背景にして、林訳がシェイクスピア戯曲を小説化したことを認めて批判を加えた。それを決定的なものとする。

鄭振鐸による批判――確定

劉半農の文章につづいて重要なのが鄭振鐸の論文だ。1924年10月９日に死去（享年七十三）した林紓を追悼し、林訳小説を解説して詳細だからである。

鄭振鐸の論点はふたつある。重要な意味をもった箇所だから少し長いが翻訳する。

〇鄭振鐸「林琴南先生」『小説月報』第15巻第11号1924.11.10。9頁（傍線省略）

「私たちはこの統計（注：林訳の原作者、原作名、と翻訳名を羅列したもの）を見たあとで、当然、林琴南氏にとても感謝をする。なぜなら、これら多くの重要な世界名著を私たちに紹介してくれたからだ。その一方で、彼の労力の大半が空費されたことを残念に思わざるをえない。なぜなら、彼が翻訳した156種の作品のなかで、わずかに60、70種類が著名で（そのなかには、なおハガード、コナン・ドイルのふたりの２流の小説が27種も混ざっている。だから156種のうち重要な作品は３分の１にもならない)、そのほかの書はすべて２３流の作品だから訳す必要もなかった。我們見了這個統計之後，一方面自然是非常的感謝林琴南先生，因為他介紹了這許多重要的世界名著給我們，但一方面却不免可惜他的労力之大半帰於虚耗，因為他在所訳的一百五十六種的作品中，僅有這六七十種是著名的，（其中尚雑有哈葛徳及科南道爾二人的第二等的小説二十七種，所以在一百五十六種中，重要的作品実尚占不到三分之一，）其他的書却都是第二三流的作品，可以不必訳的」

林紓の翻訳を、一応はもちあげる。だが、批判することも忘れない。文学革命派の人々は、ハガード、ドイルなどの大衆小説を嫌っていたとわかる。

つぎの文章が、本稿で問題にする箇所だ。

「もうひとつある。これも林氏は彼の口述翻訳者によって間違わされたのだろう。小説と演劇は、その性質はもともとまったく違う。しかし、林氏は、多くのとてもすばらしい脚本を小説に翻訳してしまった――多くの叙述を加え、多くの対話を削除し、原本とはまったく違う本に変えてしまったのだ。たとえばシェイクスピアの脚本『ヘンリー４世［亨利第四］』、『リチャード２世［雷差得紀］』、『ヘンリー６世［亨利第六］』、『ジュリアス・シーザー［凱徹遺事］』およびイプセンの『幽霊［群鬼（梅孽)］』などすべて彼は翻訳して別の本に変えてしまった――原文の美しさと風格、および重要な対話は完全に消滅してしまった。これはまったくチャール

ズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことにならったもので、なぜ「原著者シェイクスピア」「原著者イプセン」と書かなくてはならないのか。林氏はたぶん小説と戯曲の区別があまりはっきりしていなかったのだろうが――中国の旧文人は小説と戯曲の区別をつけることができず、たとえば『小説考証』という本は、小説といいながら無数の伝奇をそのなかに含ませている――しかし、口述翻訳者は彼になぜいわなかったのだろうか。還有一件事，也是林先生為他的口訳者所誤的：小説与戯劇，性質本大不同。但林先生却把許多的極好的劇本，訳成了小説――添進了許多叙事，刪減了許多対話，簡直変成与原本完全不同的一部書了，如莎士比亜的劇本亨利第四(ママ)雷差得紀亨利第六凱徹遺事以及易卜生的群鬼（梅孽）都是被他訳得変成了另外一部書了――原文的美与風格及重要的対話完全消滅不見，這簡直是歩武却爾斯、蘭在做莎氏楽府本事又何必写上了『原著者莎士比亜』及『原著者易卜生』呢？林先生大約是不大明白小説与戯曲的分別的――中国的旧文人本都不会分別小説与戯曲，如小説考証一書，名為小説，却包羅了無数的伝奇在内――但是口訳者何以不告訴他呢？」

林訳『吟辺燕語』の原作はラム姉弟の作品だ、と鄭振鐸は知っていたのだろう。ゆえに、『吟辺燕語』には触れず、そのほかの戯曲題名を掲げたと推測できる。つまり、鄭振鐸は、批判の根拠を部分的に修正したのである。彼は、また、そうすることによって劉半農をかばった。やり方は巧妙である、といわなければならない。

引用文の「チャールズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことにならったもの」という書き方が、シェイクスピア作品を小説化したことを意味する。その大筋は変わらない。しかし、その根拠となるものを別の作品に差し替えた。これ以後、林訳批判にさいして『吟辺燕語』は具体例から外されることになった。

鄭振鐸らが林紓を批判する理由のひとつは、くりかえすが、シェイクスピア原作である「ヘンリー４世」以下の戯曲を勝手に小説化したことだ。

鄭振鐸は、口述翻訳した共訳者の責任に少しは転嫁している。だが、これはいわば言葉のアヤである。いくら改組後の『小説月報』とはいえ、商務印書館の刊行物だ。商務印書館の営業に多大の貢献をした林紓の追悼文なのだから、それくらいのアイサツは鄭振鐸でもする。外国小説の翻訳シリーズ「説部叢書」に林訳は収められている。そればかりか、林訳だけを引き抜いて「林訳小説叢書」を２集で全100種も刊行しているくらいだ。商務印書館は利益を追求している会社である。売れな

ければそのような特別扱いはしない。

鄭振鐸は、後に「清末翻訳小説対新文学的影響」という文章で同じことを簡潔に書いている。その箇所を翻訳して示す。

> 林紓――字は琴南。本人は外国語を理解しなかったが、彼の複数の友人が外国語を理解し、口述翻訳によって林氏が記録した。当時、このようにして翻訳した作品は多かった。彼は「翻訳の王」と称せられ、『椿姫』よりはじまって全部で165種の小説を翻訳した。彼には大きな欠陥があって人に批判されたが、それはすなわち原作の内容および形式に頓着しなかった［不顧原作的内容及形式］ことである。彼が翻訳して比較的よいのは Scott と Dickens の作品であるが、関係のない作品も翻訳している。*7

短文だからこそ、鄭振鐸の従来の考えが、それも彼が核心だと考える部分が、直截に露呈しているということができよう。「形式に頓着しなかった」というのが、戯曲を小説化したことを意味している。鄭振鐸は、林訳の欠陥はここにこそあると主張するのである。

林訳評価の方法には、ひとつの形がある。確認のためにその構造を再度書いておく。

すなわち、林訳にまとわりつく戯曲の小説化という欠陥に関しては、研究者の全員がその事実があると認定している。これは研究者の共通認識である。林訳は、その根底に動かしがたい欠陥をかかえていると認めたうえで、最終的な評価について正と負の変化をつける、という構造なのだ。

戯曲の小説化に関して、これは冤罪事件だ、というのが私の見解である。だが、一般の研究者にはまったくその認識がない。長年にわたってその認識がないからこそ、これは大きな問題となる。

林紓批判の論拠、すなわち翻訳の欠陥について、その成立過程にひとつの筋道があることが理解できるだろう。劉半農に源を発し、胡適が継承追認して鄭振鐸が決定的なものにした。これを把握しておけば、林薇をへて現在まで一直線につながっていることがわかる。

あとは、論拠を同じにした論文が、あげるだけでもわずらわしいくらいに大量生産された。今も書かれて発表されている。

時代によって林紓の評価が正負の間を揺れるのは、先に説明した通りだ。ただし、何度もいうように、前提となる林訳の欠陥、すなわち本稿で問題にする戯曲の小説化――林紓は戯曲と小説の区別もつかないほどに愚昧である、について研究者の認識は一致している。例外は、私の知る限り、ない。欠陥について触れない、という文献もある。それらについては、本稿では基本的にとりあげない。

発表される研究論文の多くは、林訳の欠陥のひとつである小説化について、先行論文をそのまま引用する。ことばを少し変えて追認する。研究界全体で、見解が統一されており、まことに気味が悪いくらいに見事というほかない。以下で、乱れぬ統一ぶりについて年を追って紹介する。私の見落としがあるにしても、ここにあげるのはかなりの量になる。あらかじめ書いておくが、いまから紹介する各論文について、私は批判しているのではない。事実として、そういう文章が発表されていることを見ておきたいだけだ。本稿が結論においてそれらとは違うことを示すためでもある。

のちの研究者が、定説をどのようにあつかったのか、私には興味がある。言及する文献にできるだけ当った。引用をして確認しておきたい。だが、同じ記述がつづいて退屈に感じられる人がいるかもしれない。そう思われる読者は、「３林訳シェイクスピア歴史劇の底本」に飛んでいただきたい。

2　定説がくり返される

林紓の漢訳を説明して、研究者はきまりきったようにその欠陥を指摘する。「外国語を理解しない翻訳者」という語句が論文名になったり、時には副題に添えられることもある。その呼称に林訳の評価を代弁させるのだ。つまり、でたらめな翻訳者、またその翻訳作品であるという意味を言外に込める。

林訳の欠陥を数え上げる多くの論文を紹介するまえに、阿英の記述について説明する必要があるだろう。なにしろ、『晩清小説史』という専門著作を、しかも1937年という早い時期に刊行している。劉半農、胡適、鄭振鐸らが行なった林紓批判のあとで、阿英が林訳をどのように評価しているかをまず見ておきたい。

○阿英『晩清小説史』上海・商務印書館1937.5。277頁／北京・作家出版社1955.8。182頁。

「残念なことに、林氏本人は英語を理解せず、著書の選択から口訳まですべてを

別の人に頼った。しかもその人は全面的に信頼できるわけではなく、ゆえに彼の翻訳には、原本の選択が妥当でないもの、原意を誤解しているという類の欠陥が生じている。しかし、それで彼の翻訳が作家と読者にあたえた広大な影響を隠すことができるものでは決してない。彼は中国の知識階級を西洋文学に接近させ、少なからぬ第１流の作家を認識させ、彼らを西洋文学から学習させるようにしたし、それで本国文学の発展を促進したのである」

これを見れば、阿英は、林訳の正の側面に重点をおいて解説していることがわかる。翻訳の欠陥については、わずかに原本の選択の不適当さ、誤訳しかあげていない。

劉半農、胡適、鄭振鐸らによる強烈な批判があることを、阿英が知らないわけがない。だが、清末小説について豊富な資料と知識を持っていた彼だからこそ、清末民初時期における林訳のはたした重要な役割を理解していた。阿英は、林訳の欠陥を前面に押し出すことはあえてしなかった、と私は解釈する。ただし、はたしてそれでよかったかどうかは評価がわかれるところだ。欠陥を認めて明記しながら、それでも林訳には価値があったという書き方も、当然できるからだ。

本稿で問題にするシェイクスピア作品の小説化については、阿英は言及しない。だいいち、該書第14章で解説する翻訳小説については、彼が「創作より翻訳のほうが多い」と主張するわりには紙幅の割き方が不足している。なによりも、当時あれほど盛んに出版されたコナン・ドイルのホームズ物語にはまるで興味を示さない。林訳に関して詳細に説明する余裕もなかったと思われる。もっとも、清末の範囲外だという認識があったのだろう。結果として、阿英は林訳シェイクスピア冤罪事件にかかわることを免れたということができる。

シェイクスピア戯曲の小説化について阿英が言及しなかったことは、のちの論文に影響をあたえている。つまり、阿英『晩清小説史』に依拠して書かれた論文は、自動的にシェイクスピア戯曲の小説化に触れないということだ。本稿では取り上げなかったが、これは、かなりの数にのぼる。

清末小説研究には阿英の記述が不可欠だと考えるから、彼の林訳に関する該当個所を紹介した。阿英だからこそ、清末小説における林訳の重要さを指摘することができた、とくり返す。その評価のしかたは、劉半農、胡適、鄭振鐸らに比較するとかなり慎重であったと私には思える。

だが、阿英ではない人々にとっては、林訳の欠陥は当たり前のようにして批判の

的になった。

順序が逆になったが、陳子展の文学史からはじめる。

○陳子展『中国近代文学之変遷』上海・中華書局1929.4／1931.8再版上海書店影印1982.12。145頁／上海古籍出版社2000.12。87-88頁

「（著名作家を紹介したことは容易なことではなかった）しかし、多くの小説のなかでただ40、50種がすばらしい名著にすぎず、そのほかはみな２３流の作品で多くの精力を費やして翻訳するものではなかった。ゆえに多くの人が彼のために残念がったのだ。彼自身は原文を理解せず、訳本の選択は口述翻訳者の考えに頼っており、ゆえに少なからずバカを見たのである。また、彼の訳本には原文を削除し、あるいはもとの意味を変更するなどしているが、この誤りはおそらく大半は口述翻訳者によるものであろう」

説明の口調は、どこかで見たことがあるような気がするだろう。それもそのはず、「本節は、鄭振鐸「林琴南先生」を参考にした」（146頁）とはっきり書いてある。シェイクスピア原作の小説化について陳子展はのべていない。だが、鄭振鐸の文章によっている限り、その考えから自由であるはずがない。それほどまでに鄭振鐸の指摘はのちの研究者に影響をあたえた、ということでもある。今後も、同様の文章をくりかえし目にすることになるだろう。

○譚正璧編『中国文学進化史』上海・光明書局1929.9.20。331頁

「林氏は原文を理解せず、自分で原本を選択することができなかったから、上にかかげた作品を除いては大部分が価値のない第２３流の作品であった。多くの貴重な時間を浪費したのは、残念なことだ。また、林氏は小説と脚本の区別がわからず、多くのすばらしい脚本を小説に訳し――多くの説明を加え、多くの対話を削除し改め、原本とはまったく異なる書に変えてしまった」

林紓が翻訳した原著者、題名などを掲げる。紹介する内容は、鄭振鐸の文章をそのまま引き写しているといっていい。

○池田孝「林琴南先生と曼殊大師――中国文人の先覚者」『伝記』創刊号1934.10.1。74-75頁

「２　小説と戯曲の混同……（ママ）有名な戯曲を小説体に翻訳し、許多の叙事を付け加へたり、対話を削除したりして、原文と似てもつかないものにしてゐる場合がある。例へばセクスピアの『亨利第四（ママ）』、『雷差得訳（ママ）[紀]』、『亨利第六（ママ）[遺事]』、『凱撒（ママ）[徹]遺事』及びイブセンの『梅蘖（ママ）[孽]』（群鬼）等が小説に近いものに訳出されて

をるのは大に遺憾である。これ一にその錯誤の咎は口語[訳]者にあるのであつて、外国語は矢張り立派に出来たいものであると痛感せざるを得ない」

口述訳者の責任にしている。鄭振鐸の名前は出していないが、そのまま引用したとわかる。

次は、寒光の専門著作である。

○寒光『林琴南』上海・中華書局1935.2。83-84頁

単行本で出版された最初の専門著作だと思う。林訳小説のはたした功績について力をこめて顕彰する。

だが、シェイクスピアの「亨利第四紀」「雷差得紀」「凱撒[徹]遺事」「亨利第六遺事」をかかげて「以上の４種はいずれも小説に改訳したもの」と注釈をつけている。口述訳者の陳家麟を紹介して、「シェイクスピアの脚本を小説に翻訳し、児童のための物語を筆記に翻訳したのもこの君の奇妙な業績だ！」（69頁）と「！」付で書く。林紓だけの責任ではないといいたいらしい。この部分は、寒光「近代中国繙訳家林琴南」（『新中華雑誌』第２巻第７期文学転号1934.4.10）においてすでに見えている。林紓を擁護する寒光ではあるが、戯曲の小説化については事実として認めざるをえなかったとわかる。

○呉文祺「林紓翻訳的小説該給以怎様的估価？」鄭振鐸、傅東華編『文学百題』上海生活書店1935初出未見／香港・古文書局影印1961.6再版。447-448頁／上海書店影印1981.6。447-448頁

「３　脚本を小説に誤訳してしまった　林氏はシェイクスピアの「リチャード２世」、「ジュリアス・シーザー」、「ヘンリー４世」、「ヘンリー６世」およびイプセンの「幽霊」を完全に記述体の古文に翻訳した。おそらく、口述翻訳者が本の大意をのべただけで、戯曲と小説の違いを林氏に知らせなかったためであろう」

呉文祺も寒光と同様に、林訳を高く評価する。しかしながら、やはり欠陥があることに言及しないではいられない。上に引用した小説化以外には、１に選択の不的確を指摘し、２に任意の削除をいう。いずれも、口述翻訳者の責任にしている。

その一方で、戯曲の小説化には触れない専門書も出版されている。

○朱羲胄「春覚斎箸述記巻三」『林畏廬先生学行譜記四種』上海・世界書局1949.4初出未見／改題『林琴南先生学行譜記四種』台湾・世界書局1965.4再版。之二20頁

シェイクスピア作品４点を項目に掲げる。

「雷差得紀 Richard II」、「亨利第四紀 Henry IV」、「亨利第六遺事 Henry the Sixth」、

「凱徹遺事 Julius Caesar」だ。

いずれも、林紓が陳家麟と一緒に訳述したと説明する。さらに、掲載雑誌を『小説月報』あるいは商務印書館の単行本だと述べて詳しい。だが、奇妙なのは、著者名の漢字表記を「英国莎士比亜(ママ) W.Shakespeare」としておりすべて実際とは異なるのだ。このばあい「亜」はいらない。また、「亨利第五紀 Henry V」の掲載は『小説世界』第12巻第13号と記すが、第９-10期が正しいのではないか。

朱羲胄が、これらのシェイクスピア作品について漢訳がどのようになっているのかを解説しない。『吟辺燕語』を説明し、原題を“Tales from Shakespeare”と表示しながら「原書はチャールズ・ラム著であり、シェイクスピアとするのは誤りであるともいう。詳細は不明」(之二32頁)と書いている。『吟辺燕語』を見ればラム姉弟の原作であることはすぐにわかるはずだが。

ふたたび、林紓は小説と戯曲の区別がつかない、とくり返す文章を紹介する。

〇宋雲彬著、小田嶽夫、吉田巖郎共訳『中国文学史』創元社1953.7.15。165頁

「林紓は詩歌は別とし、シェクスピアなどの西洋劇の脚本も翻訳している。しかし彼は小説と劇の区別がつかず、シェクスピアの「ヘンリー四世」、「リチャード二世」、「ヘンリー六世」や、イプセンの「幽霊」などをも、みな小説体に翻訳したので、戯曲の面白味は完全に抹殺されてしまつた。またその当時は西洋の文学史を研究する人はまだ極めて少なく、林紓のために口訳する人も、西洋文学に対しては、充分に理解していなかつたのであつた。わが国の旧い文学者たちは、元来小説と戯曲の区別はつかずにいたのだが、これは時勢の然らしめるところで、われわれは必ずしも林紓を責めるにはあたらないのである」

翻訳のもとになった書籍は未見だ。日本で翻訳されているところからも、日本の学界にある程度の影響力があったと思われる。

次に、ある書目に出会う。かすかといえば、ほんの注釈にすぎない。だが、こまかな箇所だからこそ定説がそ知らぬ顔をして露出する。

〇戚煥塤同志補充書目、蒲梢「漢訳東西洋文学作品編目――一九二九年三月止」張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版。320頁

「亨利第五紀　莎士比亜著　林紓訳」のあとに「文言で散文体に改める［文言改為散文体］」と見える。

この『漢訳東西洋文学作品編目』は、張静廬が上記資料集に収録したときにある

変更を意図的に加えた。もともと「虚白原編、蒲梢修訂」とあった曾虚白の名前を削除したのだ（蒲梢は徐調孚のこと）*8。

そのことと上記のシェイクスピア原作についての補遺は、関係がない。わずか７文字の注釈がなにを表現しているか。いうまでもなく林紓による小説化を意味しているにほかならない。劉半農から胡適と鄭振鐸を経て確立されたこの考えは、こういう小さな箇所にも表現されている。

〇実藤恵秀、実藤遠共著『中国新文学発展略史』三一書房1955.10.30。51頁

「文学は林紓によって翻訳せられた。ほんやくとはいっても、留学がえりの青年の口訳をきいて、桐城派の名文につくったものである。だから劇も物語体になっていて、原文のスタイルはつたえてないが、とにかく、これによって、西洋にもすぐれた文学のあることを知らせたのであった」

「劇も物語体になっていて」という箇所が本稿に関係する。シェイクスピアの戯曲を小説に書きかえたという意味だ。

〇復旦大学中文系1956級中国近代文学史編写小組編著『中国近代文学史稿』北京・中華書局1960.5。采華書林影印1962.2.15。286頁

「ふたりが合作するというこの方法は、その数が少ないわけでもなく、当時の条件下では免れにくい奇形の翻訳方法だった。訳本は原作に比較して、遺漏、省略、加筆という現象が普通にあり、『ドン・キホーテ』のような大作が薄い小冊子に訳されるだけだったり、シェイクスピア、イプセンの戯曲（たとえば『ヘンリー４世』『幽霊』）が小説の形式で出現するなど、見る影もなく変えてしまった」

「ドン・キホーテ」をあげる最初になるか。言葉遣いからして先行論文を引用してすませている。

後には、まさか、と思うような記述も出てくるから奇妙だ。

〇孔立「林紓和“林訳小説”」『光明日報』1962.8.30初出未見。『中国近代文学論文集』(1949-1979)小説巻 中国社会科学出版社1983.4。641頁

「林紓は翻訳するのが速かった。厳復のように慎重ではなかったから、いくつかの訳文も仔細に推敲することはなかった。ゆえに、少なくない誤解、遺漏、あるいは削除書きかえという欠点があった。ひどいのになると戯曲を小説に翻訳したりした」

定説通りにこう書いたかと思うと、それがこうじて別のところではおかしなことを筆にのせる。すなわち、「「林訳小説」のなかで当時影響の最も大きかったもの

に『巴黎茶花女遺事』があるが、これはフランスの作家小デュマの名著である。もとは脚本であった。林紓は最初に小説という形式で中国語に翻訳し中国の読者に紹介したのだ」（639頁）と説明する。たしかに小デュマは、自作を脚本にもした。だが、順序が逆なのだ。孔の説明には、首をひねらざるをえない。シェイクスピア作品にあるのだから小デュマ作品もそうだと思ったのか。孔立はなにか勘違いしている。

○戈宝権「莎士比亜的作品在中国」『世界文学』1964年５月号（総131期）1964.5.20。140頁

「そののち林紓と陳家麟は、さらにシェイクスピアの戯曲５種類について、もとづいた事柄を文言を用いてまとめて述べた。その中の４種類、すなわち『リチャード２世［雷差徳紀］』、『ヘンリー４世［亨利第四紀］』、『ジュリアス・シーザー［凱徹遺事］』は1916年の『小説月報』第７巻第１-７期に発表され、『ヘンリー６世［亨利第六遺事］』はその年の４月に単行本となり「説部叢書」のひとつにおさまった。『ヘンリー５世［亨利第五紀］』は林氏の遺訳となって1925年第12巻第９-10期の『小説世界』に発表された。これら数種の訳文は、シェイクスピア原著の粗筋を保っているだけで、しかも小説の形式を採用したため、当然のことながらシェイクスピア戯劇作品の真の面目を見いだす手だてがなくなった」

やや複雑な書き方になっている。シェイクスピアの原著を小説化したと戈宝権も考えた。だから、シェイクスピア劇のもととなった物語を林紓らが再話したといいたいわけだ。戈宝権ほどの人であっても定説を疑うことを知らない。

○曾錦漳「林訳小説研究（上）」『新亜学報』第７巻第２期1966.8.1。243頁

「シェイクスピアの作品は、ジュリアス・シーザー、リチャード２世、ヘンリー４世、ヘンリー６世など数種を林紓は翻訳しているが、同じく、もとの詩劇形式を散文小説の形式に改めている。ゆえに、林紓はふたりの英国の大文豪（注：もうひとりはスペンサー Edmund Spenser）を紹介しているが、彼の翻訳は原著をうわべだけ改めて、本来の風貌を失ったのである」

「林紓訳品表」（230頁）にも「原本為戯劇訳成小説体」と注釈をつける。林訳研究の専門論文においてくり返し記述されると、定説であることを再確認するだけになる。

○増田渉『中国文学史研究』岩波書店1967.7.25。214頁

「だがこのようなこと（注：戯曲を小説として訳した）は、口訳者の罪というより

は、林紓自身の翻訳家としての態度に係わる問題であったのではなかろうか。というのは彼の翻訳という行為の根底には、面白く読ませる、あるいは読物を提供するということが第一に考えられていたのであって（ハッガードの通俗的小説やコナン・ドイルの探偵小説が量的にみて一番多く紹介されていることでもそれは知られる）、彼ははじめから「文学」に対する忠実な態度をもっていたのではなかった。中国の小説に対して、これまで人々が抱いていた娯楽性の要求ということに焦点を合わせて、せいぜい在来の中国のものには殆んど見られなかったスケールで展開する西洋小説の伝奇性をもってこようとしただけで、基本的にはやはり在来の中国の小説家の態度を一歩も出なかったことに帰せられる。このことは彼の翻訳した原作品とその作者を見ただけで、およそ見当はつくと思うが、そのような態度であったからこそ、原文の大幅な刪削や、甚しきに至っては戯曲を小説化するといったようなことでも平然と行われたのだと考えられる」

増田渉のこの部分は、鄭振鐸の記述を紹介して書かれている。

「甚しきに至っては戯曲を小説化するといったようなことでも平然と行われたのだと考えられる」と書くところに、林訳に関する増田の評価を読みとることができる。決してほめてはいない。林紓は戯曲を小説化した、と信じているのだ。

〇細谷草子「新時代への啓示（翻訳小説の様相）」内田道夫編『中国小説の世界』評論社1970.12.10。282頁／1989.4.30三刷

「……実は林紓が翻訳した作品の大部分は、ハッガードやコナン・ドイルのような通俗作家の作品で占められている。したがって、林紓はこれほど多数の作品を訳したにもかかわらず、名作と言えるものは、わずか四十数種で全体の三分の一にすら満たない。／このようなことになった原因は何よりも、林紓自身が外国語ができず、共訳者の口訳に頼って訳述を進めねばならなかったことにあった。原文を読めない林紓は、翻訳すべき作品の選択をも共訳者にゆだねなければならなかったのだが、林紓に協力した共訳者の多くは、各国の文学史についての知識も、文学に対する理解力も十分でなく、たまたま目についておもしろそうだと感じた作品を翻訳していくだけだった。はなはだしい場合には、児童むけの物語を一篇の小説として訳したり、西洋の戯曲と小説の相違を知らなかったためか、シェイクスピアの『ヘンリー四世』やイプセンの『幽霊』などの戯曲を小説の形で訳してしまったりしているという。／言うまでもないことだが、林紓の翻訳は原文に忠実な逐語訳ではない。ストーリーは変えていないけれども、細部の叙述はかなり大胆に省略したり、改め

たりしている。それらの省略や改変によって、西洋の事情にうとかった当時の読者が作品に親しみやすくなるという効果はあっただろうが、林紓自身の西洋文学への理解が底の浅いものだったために、原作の味わいが失われ、ただストーリーだけが伝えられる結果となることも、往々にして避けられなかった」

中国の研究をそのまま下敷きにした記述だということができる。無理もない。林訳小説を原書で読むことは、当時の日本ではほとんど不可能であったからだ。該書は、漢訳された（内田道夫編、李慶訳『中国小説世界』上海古籍出版社1992.7）。

〇陳敬之「林紓」台湾『暢流』第44巻第１-４期1971.8.16-10.1初出未見。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』福州・福建人民出版社1983.6　中国現代文学史資料彙編（乙種）。346頁

「１、翻訳は第１流の作品ばかりとは限らない。／２、小説と脚本を混同した。／３、児童読物を筆記小説と考えた。／４、訳文は原書と一致しているとは限らない」

言いまわしを少し変えただけで、従来の定説をくり返す。

〇任訪秋「林紓論」『開封師院学報』1978年第３期初出未見。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』376頁

「林訳の最大の欠点は、彼が外国語を理解せず、他人が口述するのに頼ったため、原作にたいして十分には忠実でなかったことだ。内容からいえば削除が多いばかりではなく、作品の体裁においても改変をしている。脚本を小説に翻訳したように、原作との違いはさらに大きくなってしまった。たとえばシェイクスピアのいくつかの脚本、イプセンの『幽霊』（訳名『梅孽』）などは彼の翻訳によって、まったく別の本に変化してしまい、そのため原書の風格はほとんど完全に失われてしまった」

定説に従っているだけだが、ここまで批判すると、論文の後半部分で正の評価をくだすのは力業にならざるをえない。

〇曾憲輝「林紓伝」『福建師大学報』1981年第２期初出未見。複印報刊資料。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』6頁

「林紓は外国語を理解しなかったため、翻訳は別の人が口述するのに全面的に頼った。原著について厳格な選択を行なう方法がなかったから、２３流の作品を多く翻訳し、少なくない貴重な時間を浪費したのである。訳文についての書きかえ、訳し間違い、はなはだしくは自分の文章をつけ加えたなど非難される箇所は非常に多く、ときにはすばらしい脚本を小説にして翻訳してしまったこともある」

これも林紓についての専門論文である、と強調しておく。脚本を小説化した、と確信をもって述べて疑うところがない。曾憲輝は、のちに専著を刊行した（『林紓』瀋陽・春風文藝出版社1999.1。挿図本中国文学小叢書91）。こちらでは、小説と戯曲の区別をつけない（30頁）、と触れるにとどまる。

〇商務印書館編輯部「出版説明」（英）蘭姆著、林紓、魏易訳『吟辺燕語』北京・商務印書館1981.10。1頁

「林紓本人は外国語を理解せず、他人の口述にたよって翻訳を進めたから、訳文は各種の欠点を免れなかったが、しかし、ひとりの古文家として、原著の風格を会得するのがうまく、訳筆は真に迫り流暢で、……」

1981年、商務印書館は、厳復訳８種類と林紓の翻訳10種類を復刻した。ふたりの業績を顕彰するためであるのはいうまでもない。その解説の一部分を上に示した。

私が問題だと思うのは、顕彰を目的とする文章であるにもかかわらず、「訳文は各種の欠点を免れなかった」と記述せざるをえないという事実なのだ。商務印書館の編集部が、わざわざ戯曲の小説化を含んだ各種の欠点に言及するのは、それが学界の定説であるからだ。そうでなければ、誰が批判のことばを口にするだろうか。

この新しい「林訳小説叢書」を編集したのは、潘安栄だと説明がある。その彼が、編集の過程で集めた大量の資料にもとづいて書いたのが「林訳小説及林紓其人」（『語文教学与研究』1982年第１期初出未見／宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第２巻武漢・湖北教育出版社2004.10。66-81頁）だ。林紓没後、彼についての評価が、あるものは比較的公平だし、あるものは批判だけ、またあるものは彼の業績についてかなり低いことをいう。

1924年から数えれば新しい「林訳小説叢書」の発行は57年目になる。半世紀以上も経過すれば、冷静に評価する必要があるという意識もでてこよう。該史料の編集担当である汪家熔は、この点を重視した。寒光、鄭振鐸、銭鍾書らの文章がすでにあるが、潘安栄の論文だけを特に収録した理由である。

潘は、林訳の優れた点と欠点をふたつともに取り上げる。公平に評価したいという意欲のあらわれだ。欠点として、誤訳、訳しもれ、削除などが相当に多いことをいう（76頁）。しかし、それは当時のおいてはしかたのないことだった、と弁護する。そこまではよろしい。ただ、不思議なことに、鄭振鐸があれほど声をはりあげて批判した戯曲の小説化については、潘は無視するのである。正負ともに視野にいれながら、公平に評価することの必要性を指摘する潘安栄だ。その彼が、小説化と

いう点については、無視して沈黙を守る。不自然である。戯曲の小説化については、弁護の余地がないと考えたか。説明がないからわからない。私には納得のいかない書き方である。公平な評価を心がけて、結果として公平にならなかった。なぜなら、問題を恣意的に取捨選択したからだ。

潘が故意に無視した戯曲の小説化であった。彼の論文が発表された以後も、従来通りそのことを指摘して林訳批判の理由にするのだ。

○馬泰来「林紓翻訳作品全目」銭鍾書等著『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981.11。67頁

目録であって論文ではない。だが、比類なき詳細さで圧倒するこの目録は、研究者にとっては基本資料のひとつである。ゆえに、大きな影響力をもっていると断言できる。たとえば、徐鵬緒、張俊才『中国近代文学研究概論』（天津教育出版社1992.5）において、馬泰来の目録は、高い評価を与えられている（440頁）。

その馬泰来が、シェイクスピアの林訳を５種類あげて「これと以下の４種は、実はシェイクスピアの脚本である」と注釈をつけた。原作が脚本であるのを小説に書き直した、と馬も考えているのだ。次の論文においても変化はない。

○馬泰来「林訳閑談」『書林』1982年第１期1982。31頁

「林紓の翻訳について人々が言うとき、いつも彼はシェイクスピアの作品を翻訳したと説明する。このいい方は正しくはない。なぜなら、シェイクスピアが書いたのは戯曲であるが、林紓が翻訳したのは筋書き抜粋にすぎないからだ」「林紓と陳家麟が翻訳した『リチャード２世』、『ヘンリー４世』、『ヘンリー６世』、『ジュリアス・シーザー』および『ヘンリー５世』にいたっては、すべて筋書きを抜粋したものにすぎない」

馬泰来は、ここでは筋書き抜粋という表現に変えている。だが、その内容は脚本の小説化に違いない。彼も定説の強化に協力しているということができる。

○曹大澂「不懂外文的大翻訳家林紓」『文物天地』1983年第３期1983.5.31。35頁

「林紓が人に批判されているいくつかのシェイクスピアの翻訳、たとえば『リチャード２世』、『ヘンリー４世』、『ヘンリー６世』、『ジュリアス・シーザー』などは、訳文のなかにみだりに叙述を加え、対話を削除したばかりか、そのうえ蛇足をくわえシェイクスピアが書いていない内容を増加させて文壇の笑いものになった」

戯曲を小説化したのであるから文壇の笑いものである。研究者たちは、林紓を批判し笑いものにしていることが理解できよう。

○兪久洪「林紓翻訳作品考索」薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』福州・福建人民出版社1983.6。404頁

「林紓の翻訳の大部分は小説であり、原作が戯劇でも小説の形式で翻訳した。たとえばシェイクスピアの『リチャード２世』などはそうである。……」

林紓の翻訳目録につけた前言において上のように書いている。これも林紓研究の専門書に掲載されたものだ。

○馬祖毅『中国翻訳簡史――“五四”以前部分』北京・中国対外翻訳出版公司1984.7。305頁／増訂版1998.6、2001.5第２次。426頁

「しかし、これらの作品はすべて意訳であり、あるものは省略が多く、『ドン・キホーテ』などは薄い『魔侠伝』に訳しただけだし、またシェイクスピアの『ヘンリー５世』は小説に改訳してしまった」

馬祖毅『中国翻訳史（上巻）』（漢口・湖北教育出版社1999.9。742頁）においても、同じことを述べている。

○康来新『晩清小説理論研究』台湾・大安出版社1986.6。281頁

「さらに、林氏はシェイクスピア（W. Shakespeare）の雷差得紀（Richar[ママ]e Ⅱ）、凱撒[ママ][徹]遺事（Julius Caesar）、亨利第四紀（Henry Ⅳ）、亨利第六遺事（Henry Ⅵ）、およびイプセン（Ibsen）の梅孽（Ghosts）を完全に記述体に翻訳してしまった。これもたぶん口訳者が大意をのべただけで戯曲と小説の違いを林氏に話さなかったため、戯曲を小説に誤訳させてしまったのだろう」

口訳者の責任にしてしまったところ、あるいはシーザーの書名を間違っているところから、康来新は、寒光『林琴南』をそのまま利用したのかもしれない。

○周振甫「林紓」『中国大百科全書・中国文学』Ⅰ　北京・中国大百科全書出版社1986.11。432頁

「林紓は、外国語を理解しなかったので原本を選択する権利はすべてが口述翻訳者の手にゆだねられた。ゆえにいくつかの誤りも生産されたのである。たとえば名著を改編した、あるいは省略した児童読物を名著の原作そのものだとする、シェイクスピアとイプセンの脚本を小説にして翻訳する、イプセンの国籍をドイツと誤る、などである。そうではあっても、林紓はなお40種あまりの世界の名著を翻訳しており、これは中国では、現在にいたるまでも最初のことであった」

「イプセンの国籍をドイツと誤る」（最初に指摘したのは鄭振鐸）と書いて、林紓の文学的知識の不足を批判している。ならば、魯迅がジュール・ヴェルヌ作品を翻

訳して著者をアメリカ人培倫（『月界旅行』）、イギリス人威男（『地底旅行』）と誤ったことも書くべきだろう。だが、こちらには知らん顔だ。もっとも、魯迅のばあいは拠った日本語の表記がそもそも間違っていた。また、項目の執筆者が異なるからしかたがないか。

周の書き方は、林訳の欠陥を認めたうえで正の評価を下す例のひとつの典型である。百科辞典にこう書かれては、といってもそれまでの定説をくり返しているだけだが、それ以降の記述はますます定説からはずれることはない。

○北京図書館編『民国時期総書目（1911-1949）』外国文学　北京・書目文献出版社1987.4。50頁

『亨利第六遺事』の「説部叢書」第３集第１編、および「林訳小説叢書」第２集第15編の２種類を収録する。注釈をつけて「原著は脚本であるが、本書は改訳して小説にした」と説明する。目録に書かれたことだから、定説を支持しさらに堅固にしたということができる。

○《中国翻訳家詞典》編写組『中国翻訳家詞典』北京・中国対外翻訳出版公司1988.7。49頁（表紙は『中国翻訳家辞典』）

「翻訳には他人の口述に全面的に頼っており、原著について厳格な選択を行なうことができず、多くの第２３流の作品を翻訳して少なくない貴重な時間を浪費した。訳文には削除、誤訳、はなはだしくは自分の筆を加えるなど非難すべき箇所がとても多く、ときにはすばらしい脚本を小説に翻訳してしまった」

「しかし」とつづいて、結局のところ彼の翻訳には価値があった、と評価は正にしてしめくくる。

○任訪秋主編『中国近代文学史』開封・河南大学出版社1988.11。480頁／2000.8第３次印刷。462-463頁

「これらの致命的な欠陥（注：間違い、遺漏、省略、改訳などの現象）は、多く人々が批判するところだ。具体的には、その１、作品の体裁を改変した。シェイクスピアの戯劇『ヘンリー４世［亨利第四］』、イプセンの脚本『幽霊』などは、小説に翻訳されてしまい全文の風格はまったくなくなってしまった。その２、原文を勝手に削除した。たとえばユゴーの『九十三年』（林訳『双雄義死録』）は原文にくらべて半分を削除し、セルバンテスの『ドン・キホーテ』は原文のわずかに３分の１でしかない」

任訪秋は２度目の登場だ。鄭振鐸の文章の誤植（亨利第四）を含めてそのまま引

用している。「致命的な欠陥」という事実の認識に揺らぎはない。

〇連燕堂「近代翻訳的発展脈絡」中国社会科学院文学研究所《中国近代文学百題》編写組『中国近代文学百題』北京・中国国際広播出版社1989.4。359頁

「以前は外国の戯劇を翻訳するのに、劇の筋に重点を置いていたため、たとえば林紓がシェイクスピアを翻訳したように、多くが叙事体に書き直したのである」

戯曲についての説明で林紓が引き合いにだされる。連燕堂の執筆になる「林紓和“林訳小説”」では、戯曲の小説化については触れていない。小さな箇所だからこそ、定説が疑いもなく出現するらしい。

〇レナート・ランドバーグ Lennart Lundberg『翻訳家魯迅 Lu Xun as a Translator』, Stockholm University, 1989.10 p.18

「彼（林紓）は、シェイクスピアほかの戯曲を小説に変えたりもした」

林訳の欠陥は、世界的に有名である。

〇謝飄雲「文学領域放眼看世界的先駆——林紓小説翻訳評述」『語文輔導』1989年第３期初出未見。『中国近代文学評林』第４輯1991.7。279頁

「いくつかのとてもすばらしい脚本を小説と粗筋概要に訳してしまったのは、たしかに小説と戯曲を分けなかったのである」*9

文章の内容は、論文名からもわかるように林訳小説を高く評価する。しかし、避けることのできなかった誤りといいながらこう書かざるをえないほどに定説なのである。

〇劉波「林紓」呂慧鵑、劉波、盧達編『中国歴代著名文学家評伝』続編三　済南・山東教育出版社1989.12。664頁

「第２、彼（林紓）と合作者には必要な文学常識が欠けていたため、小説と脚本を混同してしまった。多くのすばらしい脚本を小説に翻訳したのだ。多くの説明を加え、多くの対話を削除し、原作の様子をまったく違ったものにしてしまった。シェイクスピアの脚本『亨利四世』、『雷差得紀』、『亨利六世』、『凱撒遺事』およびイプセンの『群鬼』などは、すべて彼によって別の作品に訳されてしまい、原作の美しさと風格は完全に消失したのである」

論文全体は、林訳小説を高く評価する。しかし、最後にどうしても翻訳の欠陥を数え上げなければ気がすまないらしい。定説である理由だ。

〇施蟄存「導言」『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集１（施蟄存主編）上海書店1990.10。21-22頁

「『十之九』はアンデルセン童話選集だ。『時諧』はグリム童話選集だ。『大食故宮余載』はスペイン遊記だ。『吟辺燕語』はシェイクスピア脚本を散文で述べたもの。『荒唐言』の原作はスペンサーの長詩『妖精の女王』で、マクルホーズが散文で述べたものがある。林紓は散文本で訳出し「スペンサー著」と書いた。これらはすべて小説ではないが、それぞれ「説部叢書」、「小本小説」、「小説彙刊」などに編入し、すべて小説だと目されている。『吟辺燕語』にいたっては「幻想小説［神怪小説］」と題されている。早期の文学翻訳者、あるいは出版社の幼稚な一面をうかがうことができる」

施蟄存は、林紓が文学の類型を区別できなかった、と非難する。いうまでもなく、林紓が、詩あるいは脚本の原作を小説化した、と彼は考えている。

○郭延礼「“林訳小説”的総体評価及其影響」『社会科学戦線』1991年第３期（総第55期）1991.7.25。284-285頁。のち、郭延礼『中西文化碰撞与近代文学』（済南・山東教育出版社1999.4）所収。275頁

林訳小説がもつ多くの弱点を３件にまとめる。第１は、翻訳漏れ、誤訳および削除だ。「第２は、体裁の区分が厳格ではなく戯曲を小説に誤訳してしまった。たとえばシェイクスピアとイプセンの劇本を小説にし、また、スペンサーの長編寓言詩『荒唐言』（今は『仙后［妖精の女王］』と訳す）を散文物語体に訳した」。第３は、林紓と厳復は文言を用いて翻訳した。

最初にいわなければならないのは、該論文において郭延礼は、林訳を正の方向で評価する。その彼ですら、林訳小説がもつ多くの弱点を事実として認定せざるをえない。弱点はあるが、総体でいえばその評価は正なのだ、という論法である。従来の枠組みの範囲内であるといえる。

また、同氏『中国近代文学発展史』第２巻（済南・山東教育出版社1991.2／北京・高等教育出版社2001.7）は、林訳小説についてくわしく説明している。のちの『中国近代翻訳文学概論』（1998）にその内容がほぼ引き継がれているから、概論の方で取り上げることにしたい。

林紓は、分野を無視して結局のところ小説にしてしまった。先行論文が、例外なくそう書いている。後発の研究者が、そのままを受け入れるのもしかたがないだろう。反対する材料を持たないからなおさらだ。

○相浦杲「『小説月報』の研究」『求索――中国文学語学』未来社1993.1.30。303-304頁*10

「林紓は外国語を知らなかったし、原本の選択もおのずから口訳者にたよらざるをえなかったから、彼の翻訳作品は必ずしも第一流の作品ばかりではなかったし、ハガードやコナン・ドイルの第二流、第三流の作品もその中にまじっていた。彼はまた翻訳に際して、ときには原文を任意に削除したり、つけ加えたり、あるいは、たとえば、シェイクスピアの戯曲を小説のように訳したりして、文学常識と文学史的知識に欠けるところがあったが、それらは鄭振鐸（「林琴南先生」――『小説月報』15巻11号所載）が述べるように、口訳者に誤らされた、と言うべきであろう」

鄭振鐸の名前を出しているように、彼の説明をそのまま受け入れている。

〇賈植芳、兪元桂主編『中国現代文学総書目』福州・福建教育出版社1993.12。916頁

『亨利第六遺事』が商務印書館の「説部叢書」と「林訳小説叢書」に収録されていることが記録される。それに注して「原著は戯曲、小説に改訳された」とある。

この注釈は、定説に従っていると容易に理解できる。注釈者にすれば、それまでの研究成果を書き加えただけだ。今後の研究に役立つと考えたにほかならない。研究熱心、あるいは親切心からでたものだと私は疑わない。だが、結果としては林紓批判にもなっているのだ。

同じ調子で林訳批判が続けば、読む方もいやになってくる。研究者であれば、なおさらだろう。林訳の欠陥にはひとまず触れず、正の方向で全面的に論を展開したいという人も出現する。その例をひとつだけあげておきたい。

〇熊月之『西学東漸与晩清社会』上海人民出版社1994.8。703頁

「林訳小説選集のよしあし、合作した翻訳者の素質の上下、訳文の誤り、文筆の優劣については、文学評論界ではすでに少なくない具体的な研究があるから、ここではもう引用して述べることはしない」

熊月之は、林訳についての欠陥を十分に知っている。承知した上で、こう書いたのである。研究界において、林訳の欠陥という考えが定着していることを逆に証明する解説にもなっている。

このあとも林訳批判が続く。途切れることはない。

〇宮尾正樹「林紓――外国語のできない翻訳者」『しにか』1995年３月号1995.3.1。63頁

「訳す必要のない二流の作品を大量に訳した（特に辛亥革命以後）とか、誤訳が多い、原著のスタイルを勝手に変えたなどといった悪評も多いが、彼の訳した小説

が同時代の文人の涙を誘い、また、後に新文学の担い手となった人々で、林訳小説によってはじめて西洋の小説に触れたと記している者は、魯迅、周作人、郭沫若、朱自清、謝冰心と枚挙にいとまがないほどである」

林訳を正の方向で評価する。だが、その根底に横たわる「二流」「誤訳」「スタイルを勝手に変えた」を否定するわけではない。

「原著のスタイルを勝手に変えた」が、つぎの文章では「シェイクスピアの戯曲などのリライト」と表現を変える。

〇宮尾正樹「林紓」『集英社世界文学大事典』４　集英社1997.7.25。735頁。また、１冊本の『集英社世界文学大事典』同社2002.2.26。1832頁

「シェイクスピアの戯曲などのリライトや大衆小説の類いが大半だったが、世界文学の名作も数多く含まれていた」

「戯曲などのリライト」は、以前の文章の流れから判断して戯曲の小説化をいっているのだと考える。定説のままをくり返しているにすぎない。

〇鄒振環「名著名訳与名作家――《撒克遜劫後英雄略》在中国」『影響中国近代社会的一百種訳作』北京・中国対外翻訳出版公司1996.1。199頁

「林紓の多くの翻訳には大きな省略、増補あるいは解釈があり、あるものは形式と文体すら改めているものがある。しかし、この翻訳（注：撒克遜劫後英雄略）は、原文との違いはそれほど大きくはない」

ウオルター・スコット Walter Scott『アイヴァンホー Ivanhoe』の林訳を紹介して上のように述べた。自分で確認した『アイヴァンホー』について林訳が原文からそれほどはずれていないと鄒振環は自信をもって説明している。その彼ですら、従来の定説――「形式と文体すら改めている」、つまり、戯曲の小説化をあげざるをえないほどに、この定説はゆるぎなく定着しているとわかるのだ。

1991年の彼の論文「接受環境対翻訳原本選択的影響――林訳哈葛徳小説的一個分析」（『復旦学報（社会科学版）』1991年第３期1991.5.10）にさかのぼってみよう。

「彼ら（林紓の共訳者たち）の口訳がいかに誤謬百出であるかをあげ、また、彼らが小説と戯曲を混同しているかを指摘することのできる人もいるだろう。さらに訳本と原本を比較対照することによって、原文の風格と重要な対話がいかに変形されたか、またそれを根拠に彼らが外国文学の常識を欠いていたことの証拠にする」（42頁）。

鄒振環は、こう書くことによって定説を肯定する。ただ、私には彼が慎重に説明

しているように見える。なぜなら、鄒は自分の意見だと明言するのではなく、他人の評言として紹介しているからだ。この部分につづけて、その種の削除と改作は当時の特徴であったと弁護する。正の評価をしていることがはっきりわかる。鄒振環が林訳を肯定する姿勢は明らかであるが、同時に、戯曲の小説化についての事実そのものを否定するにはいたっていない。

○林煌天主編『中国翻訳詞典』武漢・湖北教育出版社1997.11。416頁

ふたつの項目で林訳の解説がある。該当部分のみを示す。

袁錦翔「林紓」

「（翻訳する）速度は人を驚かせるくらいはやく、ゆえに訳し間違い訳し漏れが少なくなく、時には笑いものになることもあった。たとえば、イプセンをドイツ人に訳したり、シェイクスピア劇を小説にしたりしたのだ。彼には原作を厳密に選択する方法がなく、結果として多くの２３流の作品を翻訳した」

賴余「林紓的翻訳」

「でたらめ訳、改訳、加筆訳、訳し漏れ、誤訳の箇所が少なくない。林紓は、少なくない西洋文学の名著を翻訳したが、しかし、さらに少なくない西洋の２３流の作品を翻訳した。林紓は、いくらかの優秀な劇作、たとえばシェイクスピアのHenry Ⅳ、Henry Ⅵ などを記述体の文言小説『亨利第四紀』および『亨利第六遺事』（今は『亨利四世［ヘンリー４世］』『亨利六世［ヘンリー６世］』と訳す）に翻訳し、多くの描写を増加させ、多くの対話を削除した。彼はフランスのユゴーのQuatre-vingt-treize を訳して『双雄義死録』（今は『九三年［九十三年］』と訳す）としたが、分厚い原著を薄っぺらな訳書に変えてしまった。当然、これも口述者が省略本に拠ったためであるという可能性もある。林紓が誤訳した箇所も少なくはない。時には、原書の作者の国籍を間違ったこともある。たとえば、ノルウェーのイプセンの国籍をドイツとした」

従来の定説をそのまま述べているにすぎない。このような大型辞書は、中国では権威を持つものとして重要視される。ゆえに、その記述は、定説を強固にするという意味において、研究者に対して少なくない影響を及ぼすと考えていい。

辞典類で「近代」を書名に冠しているものそのほかを、ここで少しまとめて紹介しておく。以下の辞典には、林紓の項目はあっても、林訳の欠陥については、基本的に触れていない。

黄霖「林紓」『中国古代小説百科全書』北京・中国大百科全書出版社1993.4。296

-297頁

執筆者名不記「林紓」「林訳小説」魏紹昌、管林、劉済献、鄭方沢主編『中国近代文学辞典』河南教育出版社1993.8。271-272、276頁

林薇「林紓」孫文光主編『中国近代文学大辞典』合肥・黄山書社1995.12。586-587頁

梁淑安「林紓」梁淑安主編『中国文学家大辞典・近代巻』北京・中華書局1997.2。272-273頁

著者名不記「林紓」銭仲聯ら主編『中国文学大辞典』上海辞書出版社1997.7。1257頁。修訂本２冊2000.9／2001.8第2次印刷。1364頁

以上の辞典項目は、いずれも中国近代文学において林訳小説のはたした小さくない役割を認めている結果なのだと理解する。

○易新鼎主編『二十世紀中国小説発展史』北京・首都師範大学出版社1997.12。42頁

「林訳には、（作品）選択が厳密でない、削除、誤訳、加筆、また高尚にして信頼できないという欠陥があるにしても（銭玄同と劉半農が『新青年』の「なれあいの手紙」のなかで、これについてかなり鋭い批判を行なった)、しかし林訳の名作は今にいたるまで人気があるのだ」

林訳小説は、当時、中国人の視界を外国に向け広げて影響力があった。該書は、林紓の功績を抹殺すべきではないと書いている。それを十分説明した上で、なおかつ銭玄同と劉半農を引用しながら、林訳の欠陥に触れざるをえない。しかも、例の「なれあいの手紙」については肯定しているとわかる。疑問を感じる必要がないほどの定説だからだろう。

○孔慶茂『林紓伝』北京・団結出版社1998.2　中国文化巨人叢書・近代巻。93頁

「惜しいことに、林紓は該書（『英国詩人吟辺燕語』）の作者をシェイクスピアと間違い、常識上の大きな過ちをおかしたのである」

『吟辺燕語』の作者はラム姉弟であることは、すでに述べた。孔は、林紓が該作品にシェイクスピア著と書いたことを指摘して、それが違うという。だが、問題はそこにはない。シェイクスピアの戯曲を林紓は勝手に小説に改変して翻訳した、と批判したのが劉半農の根本的な誤りだった。これをいわなければならない。鄭振鐸がずいぶん以前に『吟辺燕語』を批判の根拠から外した理由に気づいてほしかった。

○郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3。296頁／修訂本

武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。234頁

「第３、体裁区分が厳格ではなく、戯劇を誤訳して小説にした。シェイクスピア（W. Shakespeare, 1564-1616）の脚本『リチャード２世［雷差得記］』（*Richard II*, 今は『査理二世』と訳す）、『ヘンリー４世［亨利第四紀］』（*Henry IV*, 今は『亨利四世』と訳す）、『ヘンリー６世［亨利第六遺事］』（*Henry VI*, 今は『亨利六世』と訳す）、『ジュリアス・シーザー［凱徹遺事］』（*Julius Caesar*, 今は『裘利斯・凱撤』と訳す）、『ヘンリー５世［亨利第五紀］』（*Henry V*, 今は『亨利第五』と訳す）、およびイプセン［伊卜森］（Henrik Ibsen, 1828-1906, 今は易卜生と訳す）の戯劇『幽霊［梅孽］』（今は『群鬼』と訳す）は、林紓はすべて小説にした」

「第３」とあるところからもわかるように、全部で５項目に分類している。何についての分類かといえば、林訳の欠陥なのだ。郭は「林訳小説の弱点と限界」と題し、６頁にわたって具体的に解説する（294-299頁。第2版232-236頁）。要点のみをかかげる。

第１、林紓は外国語を理解せず、多くの２３流の作品を翻訳した。第２、「林訳小説」の主要な欠点は、翻訳漏れ、誤訳および削除である。例としてあげるのが、ユゴー『九十三年』、セルバンテス『ドン・キホーテ』、ディケンズ『デイヴィッド・コッパーフィールド』だ。定説通りだといえる。そしてこの第３が、英文を補って充実した記述である。ただし、「査理」は誤植だろう。これを書くならば「理査」とするのが普通だ。勘違いだと思う（修訂本でも誤る）。どのみち、把握のしかたは従来通りのものであることは一目瞭然なのだ。第４は、文言を使用して翻訳したこと。第５、内容に封建要素を含んでいる。

これらの欠陥があるにもかかわらず、林訳小説は、中国の翻訳文学史および近代文学史において重要な地位を占める。これが郭延礼の結論である。

以上の内容は、同氏『中国近代文学発展史』第２巻（済南・山東教育出版社1991.2／北京・高等教育出版社2001.7）において、すでに述べられている。

のちの著作になるが、郭延礼のものだからここで触れておきたい。

○郭延礼『20世紀中国近代文学研究学術史』南昌・江西高校出版社2004.12。218頁

郭の論調は、こちらでも変化はない。しいて言えば、林紓の功績部分をより高く強く評価する。だから、林訳の欠陥については、ごく控えめに述べるだけだ。

「たしかに、林訳作品の中には底本の選択がよくないもの（たとえばいくつかは児童の物語読本だったりした）、体裁の区別が誤っていた（たとえばシェイクスピアの戯劇

を小説に翻訳した)、さらに若干の誤訳、訳しもれ、削除がある。そうではあるが、彼が外国文学紹介したという功績は中国近代文学史のうえでは消滅させることはできない」

欠陥については、わずかに３行にすぎない。あとは、称賛となる。私にいわせれば、それは程度の問題だ。林訳のいわゆる欠陥は事実として存在している、と把握しているのは認識構造としては同じである。

郭延礼は、さらに一歩を進める。正の方向での評価を極端に推し進めているのが注目される。

林訳の評価について、郭は、発想の転換を提起するのだ。翻訳を再創造だと考え、原作の字句にはこだわる必要がないという。つまり、「訳文を中心とする」評価の勧めである（郭延礼『中国前現代文学的転型』済南・山東大学出版社2005.10でもくりかえしている)。だが、原作の存在を無視したこの提案は、翻訳研究とは無関係である。本稿の主題から離れるのでこれ以上は触れない。

林訳の欠陥があることは認めながら、それを無視する文章も出てきておもしろい。

〇馮奇『林紓　評伝・作品選』北京・中国文史出版社1998.6　清末民初文人叢書。26頁

「もし純粋に翻訳の観点から見れば、どんな人でも「林訳小説」の多くの欠陥を挙げることができる。同時代人と後の評論家はすでにこの点については証明をしている。これに関して私たちはいちいちくどく述べる必要はない」

林訳に欠陥があることを全面的に認める。そのあとでなにを言い出すかと思えば、本当の意義は翻訳そのものにはない、翻訳をとおして民智を啓蒙し文化建設に重要な貢献をしたと強調する。いかがなものか。

馮奇は、どうしても林訳を正の方向で評価したかった。それは、理解できないわけではない。だが、欠陥があるのであれば、それは欠陥にほかならない。馮奇が林訳の欠陥から目をそらすのは、私には極端な行為に見える。

〇周発祥、李岫主編『中外文学交流史』湖南教育出版社1999.1／1999.7第二次印刷。289頁

「林訳小説の歴史地位と歴史作用は巨大だが、しかし、林訳の限界性と誤りも存在している。彼の作品選択は、いつも手当たり次第にもってくるというもので、ある作家の代表作品ではなかった。翻訳するときは、また常に原作に対して任意の加筆削除を行ない、はなはだしくは原作固有の体裁を改変した」

「原作固有の体裁を改変した」というのが、戯曲の小説化を指している。

該書は、林訳小説について高い評価を与える。紙幅も多く割いている。それはいっておかなければならない。だが、最後の部分で、それこそとってつけたように林訳の欠陥に触れざるをえなかった。定説の定説たる所以である。

○湯哲声『中国現代通俗小説流変史』重慶出版社1999.1。51頁

「問題は、多くの翻訳家が中国読者の口に合わせて外国作品を中国小説のように変えたがったことだ。たとえば、林紓が翻訳したシェイクスピアの戯曲いくつかとイプセンの『幽霊［『群鬼』(訳名は『梅孽』)］』は、全部を中国の物語に改めたのである」

戯曲を小説化したと直接は書いていない。中国化は小説化とは違うというのかもしれないが、同類としてあげておく。

○郭麗莎「林紓与哈葛徳小説的関係」『貴州社会科学』1999年第３期（総第159期）1999.5.20。69頁

「林紓はハガードの小説を好んでいたから、翻訳する時も格別にまじめだった。周知のように、林紓は西洋の小説を翻訳して常に原著に対して削除を行なった。しかし、彼はハガードとディケンズの作品については、原著のかたちを極力保持しようとした」

郭麗莎にしてみれば、林訳の基本的欠陥については疑う必要もないことだった。だから、ハガード作品の翻訳が原著に忠実であるのは、特別な理由によるものだ、としか考えられなかったのだろう。

「ゆえに、彼の原著に対する忠実さというのは、ハガード小説についての好みとそれからくる作者にたいする尊敬の念からだと解釈するほかないのである」（同上）と書く。郭のいいかたにしたがえば、林紓はシェイクスピアを尊敬していなかったという結論になる。それは、言い過ぎだろう。ハガードについて林紓が忠実な翻訳を行なったというのであれば、シェイクスピアについても同様のはずだ、という発想でなければおかしい。その発想がでてくるのを阻害するほどだから、定説なのだ。

漢訳シェイクスピアだから中国演劇史研究の方面から言及があるのは当然だ。

○瀬戸宏「中国のシェイクスピア受容略史」『シアターアーツ』11　2000年１号 2000.1.31。99頁

「林紓はさらに、『ヘンリー四世』などを直接翻訳したが、これらはすべて小説

体で訳されており、シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」

瀬戸宏は、「直接翻訳した」と書いて、林紓がシェイクスピアの原著にもとづいていることを強調し断言する。あたかも原物で検証したかのようだ。小説体に変えたといい、さらに推し進めて「シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」と説明する。奇妙な書き方だ。シェイクスピア原作は、原作だろう。シェイクスピア作品の翻訳とは認められないというのなら、何だというのだろうか。

また、「中国で最初にシェイクスピア作品の内容を具体的に紹介したのは、一九〇四年出版の林紓・魏易『吟辺燕語』であった」（98頁）と間違ったことを書く*11。「中国のシェイクスピア受容略史」は題名からもわかるように、瀬戸宏の専門分野であるはずだ。瀬戸宏は、基礎的事実を誤って信じられないほど杜撰な説明をする。清末小説研究会編『清末民初小説目録』(1988)、樽本編『新編清末民初小説目録』（1997）を見る時間を作って再考も三考もされるようお勧めしたい。

「世界のシェイクスピア」で中国を紹介する文章がある（伊勢村定雄執筆。荒井良雄ほか編集主幹『シェイクスピア大辞典』日本図書センター2002.10.25)。林紓の名前を出しておらず、こちらは論外だ（514頁)。

演劇関係ということで近頃出版されたリーバイスの著作を見る。

〇マリー・リーバイス Murray Levith『中国におけるシェイクスピア SHAKESPEARE in China』CONTINUUM，2004／2006。6頁

「さらに数年後、林は、今度は陳家麟とともに「リチャード２世」、「ヘンリー４世」１部２部を含んだ５篇の芝居物語［play stories］を出した。林はまた「ヘンリー６世」を1916年に出版し、1924(ママ)年の「ヘンリー５世」は遺作となったのだ。しかし、その時でさえ中国がシェイクスピアの脚本と出会うということについては、まだ明らかに不完全であった」

ここでリーバイスが書いているのは、林紓＋陳家麟は脚本のままではなく小説化して翻訳した、ということだ。

〇徐志嘯『近代中外文学関係（19世紀中葉－20世紀初葉)』上海・華東師範大学出版社2000.3。109頁

鄭振鐸「林琴南先生」からだとことわっている。みっつの欠陥を引用して、「２、小説と戯曲を区別しない、児童読物と筆記小説を区別しない、誤って戯曲を小説に訳した」と書く。林訳を高く評価しながら、欠陥についてはそのままを認めている。鄭振鐸の文章の影響力がいかに強いかが理解できるだろう。

○馬春林『中国晩清文学革命史』瀋陽・遼寧大学出版社2000.4。269頁

「林紓はかつてシェイクスピア戯劇を小説に翻訳したが、シェイクスピアの訳者は林紓の小説を脚本に編成して上演した」

中国演劇界におけるシェイクスピア劇の上演について説明している。それが、ややこしい。なぜなら、早期の話劇では、シェイクスピアの原作から直接漢訳した脚本を使用していないのだ。林紓の『吟辺燕語』にもとづいて、あらためて脚本に書き直したことをいっている。馬春林は、戯曲の小説化についてまったく疑っていない。

○聞少華「林紓」熊尚厚、厳如平主編『民国人物伝』第11巻　北京・中華書局2002.7。324頁

「林紓は外国語がわからなかったために合作者の口述に頼るしかなく、原著について比較し選択することができなかった。そのため大量の精力を浪費して翻訳したのは少なからぬ西洋の２３流の小説でしかなかった。はなはだしくはシェイクスピアとイプセンの脚本を小説に訳したばかりか、イプセンの国籍をドイツに誤るなどの誤謬を出現させたのだ」

著者の国籍を間違うことは、翻訳がでたらめである証拠になるらしい。

○高旭東『比較文学与二十世紀中国文学』北京・人民文学出版社2002.10。70頁

「胡適は林紓式の翻訳に不賛成でつぎのように書いている。「林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳している！これは、本当にシェイクスピアにとっての大罪人である」」

高旭東は、直接、戯曲の小説化について書いているわけではない。だが、胡適の文章を引用することで同意見であることを表明しているのである。

○程翔章、邱鋳昌編著『中国近代文学』武昌・華中師範大学出版社2003.1。226頁

「翻訳にはつねに加筆削除、誤訳訳しもれおよび改訳という現象が出現した。たとえばシェイクスピア、イプセンの戯曲を小説に翻訳し、……」

全日制高等学校課程教材だとの表示がある。定説を織り込まなくてならないのだと推測する。

○王建開『五四以来我国英美文学作品訳介史』上海外語教育出版社2003.1。33頁

「しかし、加筆と削除が多すぎる、脚本を小説に翻訳した、文言を使用した、原作の選択が不適当だ」

林紓評価が、現在にいたるまで正負の両方で存続していることをのべる箇所だ。

引用した前部分で、小説の地位を高めたところは彼の功績だと書く。戯曲の小説化については、説明の必要もない事実だという認識が王建開にはある。

○周暁明、王又平主編『現代中国文学史』武漢・湖北教育出版社2004.9。110頁

「翻訳には、書き足し削除、間違い訳しもれおよび改訳などの現象がよく出現した。たとえば、シェイクスピアやイプセンの戯曲を小説に翻訳してしまい、ユゴーの『九十三年』は半分を削除し、セルバンテスの『ドン・キホーテ』は原文のわずかに３分の１しか残らなかった、などなどである」

「林訳の意義」という箇所で説明しているのを部分的に引用した。先行する著作をそのまま取り入れている。こちらも教科書だから、どうしてもこうなるという見本だ。

○謝天振、査明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-1949)』上海外語教育出版社2004.9。272頁

「林紓らは、物語と小説の形式でシェイクスピア劇を翻訳し、もとの戯劇形式からははなはだしく遠ざかってしまい、読者にシェイクスピア劇本来の姿を見せることができなかった」

類似の文献は、私が探すから出てくるのか、もともと書かれているから目につくのか。たぶん、その両方なのだろう。

インターネット上で論文を見つけたので発表時間順に配置して次に紹介する。

○滕威「《堂吉訶德》這様来到中国――紀念《堂吉訶德》初版四百周年」『中華読書報』2005.3.23　http://www.gmw.cn/01ds/2005-03/23/content 203520.htm

「ふたり（注：林紓と陳家麟）の合訳が最も多いとはいえ、人に深い印象をあたえるたくさんの過ちもまた彼らの合作成果のなかに比較的多く出現するのである。たとえば、シェイクスピアの戯劇をすべて小説に翻訳してしまった。また、翻訳した大部分は３流の作品である」

もとが林訳「ドン・キホーテ」について書かれた文章だ。林紓＋陳家麟訳『魔侠伝』は、滕威から見れば評価にあたいするところが皆無である漢訳でしかない。その流れで林訳シェイクスピアそのほかに言及している。林紓＋陳家麟の漢訳作品すべてをあっさりと否定して大丈夫なのか、と私は心配するほどだ。滕威の文章を読んで、定説の堅固さをあらためて認識する。

○孟昭毅、李載道主編『中国翻訳文学史』北京大学出版社2005.7。57-58頁

「林訳小説は中国近現代文学史上において重要な文学現象であり、その功績は歴

史的環境のなかにおいて考察しなければならない。彼は外国語を理解せず、晩年の思想は日に日に保守に傾いていったという多くの原因があり、後期翻訳の色彩が枯れて暗く、多くの翻訳に誤訳、遺漏、削除書きかえの箇所がすこぶる多く、体裁区分が厳格ではない――たとえばシェイクスピアの戯曲『査理二世』（林訳は『雷差得記［リチャード２世］』）を小説体で翻訳した。確かにこれらは彼が当時避けることができず、残念なことであった」

ここでもなぜだか『査理二世』と誤記する。郭延礼の表現をそのまま引用したということか。ただの偶然かもしれないが。

○韓洪挙『林訳小説研究――兼論林紓自撰小説与伝奇』北京・中国社会科学出版社2005.7。125頁

「林紓は時に脚本を誤訳して小説にした。たとえばシェイクスピアの脚本『リチャード２世』、『ヘンリー４世』、『ヘンリー６世』、『ジュリアス・シーザー』、『ヘンリー５世』、イプセンの脚本『幽霊』を林紓はすべて小説に翻訳したのだ。このような状況が出現したのは、口述翻訳者が体裁について林紓にはっきりと説明しなかったか、あるいは口述翻訳者が外国の作家が書き改めた物語を訳したかであろう」

専門の著作だけあって林訳の欠陥を４点あげて記述は詳しい。上には、本稿に関係する部分のみを訳して掲げているので了解されたい。

欠陥についての定説が、従来通り固く支持され、かつまたくり返して述べられていることがわかるだろう。韓洪挙は、ある可能性に言及した。注目してよい。だが、彼はその可能性を自分で追求することはなかった。それが重要な問題であるという認識が韓洪挙にはなかったとわかる。残念なことだったといわなければならない。

これら以外にも林訳について述べた著作、論文は多い。だが、翻訳の欠陥に言及がないもの、あるいは欠陥について説明するがシェイクスピア原作の小説化について解説しないものは基本的にはぶいたからこうなった。あげるべき文献はまだほかにもあるだろう。論文名はわかっているが、日本では入手できないものはしかたがない。きりがないのでこれくらいでやめておく。

この部分の締めくくりとして、中国のシェイクスピア研究家がどのように書いているかをふたつだけ紹介する。

○張泗洋主編『莎士比亜大辞典』北京・商務印書館2001.1

各項目は、無署名だ。大項目「六、莎士比亜在中国」のなかの「１．中国莎学綜

述」―「中国莎学発展史概述」では、孫引きして「これら数種の翻訳（注：リチャード２世、ヘンリー４世、ジュリアス・シーザー、ヘンリー５世）は、シェイクスピア原著の物語の梗概を保っているだけで、小説の形式を採用しており、ゆえにシェイクスピア作品の真面目は見いだしがたくなってしまった」（1256頁）と書く。

「莎士比亜作品的中文翻訳」では、林紓の『吟辺燕語』、『リチャード２世』以下の翻訳名をあげるだけ。林訳の欠陥については触れない（1279頁）。

また、「７．中国莎学学社簡介」に「林紓」を収録するのはいい。『英国詩人吟辺燕語』および「雷差徳紀」「亨利第四紀」『亨利第六遺事』「凱徹遺事」「亨利第五紀」をあげて、当時、大きな影響を与えた（1401頁）と書くのも理解できる。ところが、「２．莎士比亜作品中文訳本」において、『英国詩人吟辺燕語』を取り上げているにもかかわらず、林訳「雷差得紀」以下の５作品にはまったく言及していない。つまり、この大辞典は、「雷差得紀」以下の林訳５作品を無視している。小説に変形されているとの認識が強いからだろうか。脚本をそのまま漢訳したのでなければ、紹介する価値もないといわんばかりだ。

〇裘克安『莎士比亜評介文集』北京・商務印書館2006.4。45-46頁

「1903年、すなわち清光緒23[29]年、上海達文社が最初に英国散文家チャールズ・ラムおよびその姉メアリが書いた『シェイクスピア物語』のなかから10篇の物語を文言文を用いて翻訳して出版した。題名を『英国索士比亜著澥外奇譚』といい、訳者名は書いていない。翌年、商務印書館は、林紓と魏易の共訳で同書の全20篇を出版し、題名を『英国詩人吟辺燕語』という。林紓は、それを幻想［神怪］小説と見なした。しかし、この本は中国人にシェイクスピアを紹介して大きな作用があったのだ。たとえば郭沫若は、彼が少年のとき該書を読み、「無上の興味を感じ、それはいつのまにか私に大きな影響を与えたのだった」と説明している。その他の近代中国の文豪、魯迅、巴金などの身にも類似の影響を見ることができる。林紓は、以後、『ジュリアス・シーザー』および『リチャード２世』、ヘンリー４、５、６世などの英国歴史劇の物語を『小説月報』誌上に掲載した」

英文学研究者は、本業だけで忙しい。中国でどのような漢訳が出版されたのかについては、興味がなさそうだ。上に見るくらいの説明しかない。林訳の内容にまで踏み込む考えはないとわかる。ただし、私が知らないだけで、この分野では詳細な論文が発表されている可能性を否定しない。

中国文学研究者は、林訳小説評価の枠組みの範囲内で、先行論文を大事に守り長

く利用しつづけていること、以上に紹介した通りである。私は批判しているわけではない。あくまでも事実を述べているだけだ。誤解のないようにお願いしたい。

それにしても、例外のひとつもなく林訳の欠陥を言い立てる文章群をながめると、その評価の揺るがないところに、私はある種の感動さえおぼえるほどだ。定説として鉄壁であり微動だにしない。冤罪事件だという認識は、露ほども存在しない。

3　林訳シェイクスピア歴史劇の底本

林紓は、シェイクスピア原作の戯曲を小説に書き直した。こう批判したのは劉半農だ。ただし、その際、彼が根拠としてあげた『吟辺燕語』は、実はラム姉弟原作の、すなわち戯曲を小説化した『シェイクスピア物語』だった。もとが散文なのだから、劉半農が提出した批判の論拠は失われる。劉は林に濡れ衣を着せた、ということもすでに指摘した。

『吟辺燕語』は劉の誤解だ。しかし、鄭振鐸は、それ以外のシェイクスピア作品を林紓が漢訳して、もとの戯曲を小説化しているという。しつこくくりかえして申し訳ない。この部分が、定説になっている。だからこそ冤罪事件となるのだ。

さて、問題になっている林訳シェイクスピアの作品を発表順にあげておく。(*印は未見)

１．原作不明

「欧史遺聞」(英) 莎士比亜原著、林紓、陳家麟同訳『上海亜細亜報』1915.9.10-10.3[12]

２．「リチャード２世 RICHARD Ⅱ」

「雷差得紀」(英) 莎士比原著　林紓、陳家麟同訳『小説月報』第７巻第１号1916.1.25

３．「ヘンリー４世 HENRY Ⅳ」

「亨利第四紀」(英) 莎士比原著　林紓、陳家麟同訳『小説月報』第７巻第２-４号1916.2.25-4.25

４．「ヘンリー６世 HENRY Ⅵ」

『亨利第六遺事』(英) 莎士比原著　林紓、陳家麟同訳上海商務印書館1916.4　説部叢書第３集第１編／上海商務印書館　林訳小説叢書第２集第15編

雷差得紀

英國哥士比爾著

閩縣林紓 侯官魏易 同譯

英王奈支倭得第三甥王冕逢屬皇太孫雷差得卽黑太子之子太子以英武之姿早年卽世畢國痛惜前星之隕故擁戴太孫時太孫甫十一歲民以悼念東宮之故咸繪誠於太孫加冕之時倫敦人庶歡踴無極巨商設機於公園易飛泉爲酒漣漣成池恣人浩飲以常理言英雄之父或產英雄之兒願乃不衞父老因大失望人既荏弱或本諸天性實亦教育使然時侍從人多騫齋進讒諂者鋤出其間卽自好之士亦圖含己私無心於爲國王長養宮中逸樂而繼惑甘言易入故樂與宵小爲緣閱歷既淺爲近習所牽引言匪弗售侍從大臣十二人尙有族父三人亦在侍中之列一爲蘭卡司忒公一爲要克公一爲格老西司忒公此三人中以玉牒近支極力輔政而格老西司忒公獨專揆席一時政府人稱之曰怪政府而識者亦稱之曰不仁之政府格老西司忒當國時有德維堡及沙復克均王之弄臣格老西司忒以罪誅之籍沒其家王怒順政權不屬則聽攝政所爲容忍及於二十二歲罷攝政大臣獨操政柄國中晏然稱治然暴局而悅深思圖報復尙畏蠱格老西司忒未敢肆之市朝在位八年忽一日降勅流格老西司忒於卡雷卡雷留爲那白雷封屬復克公格老西司忒既至配所遂爽然死獄中死狀初無人知者讓者亦未嘗詞格老西司忒之死由王授計於那白雷然物議騰沸咸指爲王之陰謀蓋王初御極尙顧恤民心已而去其僞飾恣意所如遂立布西及格雷魯與巴爲忒爲執政大臣一變從前憲政因意立制悉國家大計用私見爲去取民不堪命天下人士有目利之心則非專制斷不能據其已意故格老西司忒

「雷差得紀」

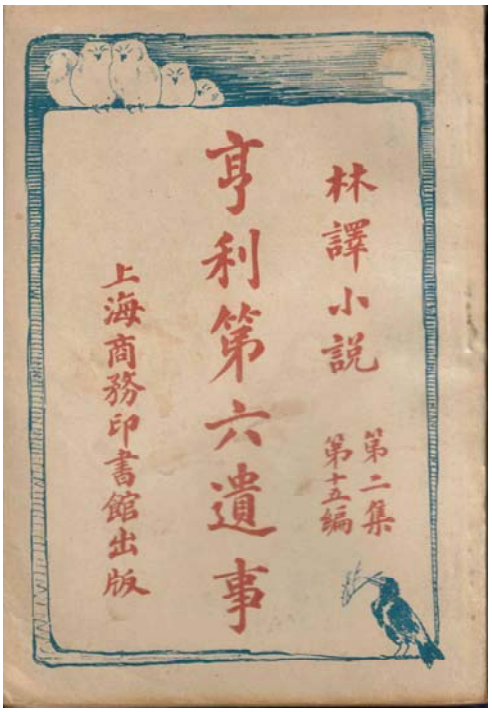
亨利第四紀

英國哥士比爾著

閩縣林紓 侯官魏易 同譯

亨利第四卽卜林不魯克之易名既卽位而心滋不懌自知得自非分動息顧不自寧蓋雷差得縊死而亨利第四之序次仍不當立者爲少年勳爵毛持毛毛持毛爲馬徹伯爵之支孫馬徹伯爵娶貴利巴爲妻貴利巴者爲來安那之女來安那爲奈支倭得第三子卜林不魯克爲奈支倭得之孫而其父蘭卡司忒公次在第四以序次論雷差得行二仲既無嗣則叔當立卜林不魯克序季也季何當立則宜立馬徹伯爵之孫蓋其母之序在第三爲次長於蘭卡司忒也以玉牒言毛持毛實生則卜林不魯克之立實非正順爲百姓所愛戴不能卽大寶於是姜結人心以遂其謀此盡人所知者且隨地演說餌以甘言於是衆心皆屬亨利第四既爲平民所舉一朝躬親大政要在收拾人心既順民心勢不能不結怨於貴族貴族貴族固陵踐平民者今則冠履倒置怨望之聲乃日踵起而貴族中尤怒者則爲鄧堪白倫鄧堪白倫之反覆無常而雷差得漸行曾加指斥謂異日必叛亨利此時諸貴族見民權漸偉亦初不加意以湯沐之邑既分各王其邑不必參與朝政然亨利第四既卽位初不以封建爲然勳議院議制地集權於中央於是抗者麇起可四十餘人亨利第四本蓄雄圖知封建之非當破碎其國土集權於一勳議院宣布叛逆與非叛逆之條例凡國用所需議院任之立稅算之表以監制其出納議員遂議禁抑諸侯之傲慢且限制諸侯養兵凡羽林之來惟朝廷蓄之貴族聞而大鬨謂竭盡心力擁立其人竟用以自困乃爭起詆誹其非亨利第四亦知貴族難心順爲其詰難至無辭以對王於手弑雷差得亦頗內愆於心知是

「亨利第四紀」



『亨利第六遺事』

凱徹遺事　英國莎士比原著

羅馬立國可四百五十年此四百五十年中幾欲一統歐西可云盛矣惟貴族平民之乖忤終未臻於和平以羅馬發祥特一小城已而統攝全歐拓地既廣殖民亦衆民衆則智識日詰意氣激昂不能屈服於貴顯大臣之下前此羅馬外侮孔熾則悉心外禦內訌少息迨宇內承平於是朝野爭競日烈一日版圖既廣於是留屯之兵亦多日防屬地人民之懷反側及羣雄既曠則武人閒居不無涉及內政人欲柄權非身當軍要不足以震衆一時已而國中有偉人出爲世界名將之一其人則凱徹也志懦既大又爲全國陸軍之元帥欲以全力平此黨爭然黨張方熾而潘佩實爲之勁敵迨潘佩敗而凱徹之位始固而潘佩諸子仍倔強不服然漫逢一戰潘佩父子盡死而餘黨均赦勿治凱徹欲圖帝業故以寬大爲體不欲樹怨於黨人然黨人之怨之者固已刺骨潘黨之人雖已蒙赦然實無感於心尚有所部之人以貫詞不均頗有觖望者雖凱徹加以懇實然均弗滿其意此外尚有翌國之志士陽與凱徹交厚而中心虞凱徹之獨斷將恢復帝制將不利羅馬之自由此三種人以外則不遺之徒覬利而動無所謂黨直寡亂之徒亦充斥於國中前此數月乘屋騎危歌誦潘佩之勳德幾暗其喉及潘佩父子大敗則又如前狀以歡迎凱徹方凱徹奏凱入都意氣頗盛一改前此謙冲之常度須知古今立大功成偉業之人其中本屬天命然身居其中者乃不知盈虧之理往往自以爲功夫以一人之聰明豈能挽回造化非有天命鳥能及此蓋英雄者上帝之機器也機器之圓軸非帝力莫運若自以爲功則謬矣君子觀凱徹極盛之時轉以

閩縣林紓　靜海陳家麟　譯

小說月報　第七卷　第五號　凱徹遺事　一

「凱徹遺事」

5．「ジュリアス・シーザー JULIUS CAESAR」

「凱徹遺事」（英）莎士比原著　林紓、陳家麟同訳『小説月報』第７巻５-７号 1916.5.25-7.25

6．「ヘンリー５世 HENRY Ⅴ」

*「亨利第五紀」（英）莎士比原著　林琴南（林紓）遺稿（陳家麟同訳?）『小説世界』第12巻第９-10期1925.11.27-12.4

未見の１「欧史遺聞」は、最近、シェイクスピア原作、林紓、陳家麟訳だという指摘があった。いままで、該作品に言及した論文はない。６「亨利第五紀」も、今、見ることができないから、本稿では触れない。なお、鄭振鐸の批判文には、この作品は挙げられていない。なぜなら、鄭振鐸の批判文が発表されたあとに公表された作品のひとつであるからだ。

上にかかげた作品名を見ると、いうまでもなくシェイクスピアの歴史劇である。ラム姉弟『シェイクスピア物語』（林訳の題名は『吟辺燕語』）に収録した以外の作品であることがわかる。作品の重複を林紓が避けたことは明らかだ。

従来の文章は、いずれも林紓が戯曲を小説化したと批判する。では、どのように小説化したのか。普通、研究者であれば、その過程を検討するだろう。それが、奇妙なことに、誰ひとりとして具体的に説明してはいない。これは、何だろうか。検証する必要もないほどに自明なことなのか。

「ジュリアス・シーザー」を例にとろう。

シェイクスピアの原文と林訳を並置する*13。参考までに、日本語訳は坪内逍遥の訳文を使用する。

FLAVIUS

Hence，home，you idle creatures，get you home!

Is this a holiday? What，know you not，

Being mechanical，you ought not walk

Upon a labouring day without the sign

Of your profession?—Speak，what trade art thou?

フレー（ビヤス）

さァさァ、帰れ帰れ。懶惰漢(ぬらくらもの)め、家(うち)へ帰れ。やい、今日は休業日か？えッ？職人の癖に、知らんか？仕事日にゃ、職業の目標(めじるし)を附けんで、出歩いちゃならん筈だぞ。汝(きさま)の商売は何だ？

これが林訳では以下のようになっている。

【林訳】羅馬立国。可四百五十年。此四百五十年中。幾欲一統欧西。可云盛矣。惟貴族平民之乖忤。終未臻於和平。以羅馬発祥。特一小城。已而統撮全欧。拓地既広。殖民亦衆。民衆則智識日諳。意気激昂。万不能屈服於貴顕大臣之下。1頁

ローマが建国してまさに450年になる。この450年間にヨーロッパを統一しようと旺盛であるといえる。ただ、貴族と平民が離反し、平和状態にはいたっていない。ローマは、特に小さな都市から発祥し全ヨーロッパを統一してしまった。領土の拡張はひろく、殖民も増加した。そのため、民衆は日々知識にたけてきており意気は軒昂にして、高位高官重臣に決して屈服しようとはしなかった。

戯曲を小説化したというのが従来からの定説である。それにしても、上に示したように両者の内容は、かけ離れてはなはだしい。見ればわかる。シェイクスピア原作冒頭のどこにローマ建国450年があるというのか。林訳は、歴史背景を説明しているのだから、独自に調べて創作したというか。林紓のばあい、常識的に考えて、それはありえない。

逆にいえば、この冒頭部分を見て、戯曲を小説化したという説明の方が奇妙であることに気づかなければおかしい。単純な疑問がわきあがる。研究者たちは、英文と林訳を比較対照したことがあるのだろうか。両者を見たうえで、林紓はもとの戯曲を小説に変えたと考えているのか。私には、不思議に思われてしかたがない。林訳を見ていれば、小説化などありえないとわかる。まったくの別物であることは、誰の目にもはっきりしている。自分で比較対照したうえで小説化だと考えたのであれば、鄭振鐸が行なった林訳批判に呪縛されている。

私がいだいたのは、簡単な疑問である。着想といってもいい。

ラム姉弟の『シェイクスピア物語』を原著者シェイクスピアと表示して漢訳したのならば、そのほかの作品も同様ではなかろうか。つまり、シェイクスピア原作の歴史劇を小説化した英文原作がもとから存在していたのではないか、という推測である。原作と林訳を対照すれば、そのあまりの隔たりから当然のように思い至るはずだ。

小説化されたシェイクスピア作品について知りたいと思った。大部な『研究社シェイクスピア辞典』（研究社出版株式会社2000.11.10）を見る。しかし、チャールズ・ラムの項目はあっても、ほかにそれらしいものはない。『シェイクスピア大辞典』（2002）も同様だ。

あるところに、「ラムの「シェイクスピア物語」というと全く少年・少女のよみものと考え、これを馬鹿にする風が少しばかり英文学をかじったものの間に見いだされるけれどもこれはとんだ誤りであると云はなければならない」*14と書いてある。まとまった説明がない理由がわかったような気がする。書きかえ、小説化という作業に関しては、日本の研究者は興味をもたないらしい。児童用を意図した書物を取り上げるのは専門家としての沽券にかかわるのだろうか。そうであるならば、中国でも同じ情況だと思われる。（だが、児童文学の専門書では様子が違う。あとで触れたい）

参考にできるものがなければ、独自に調べるほかない。いつものように手探りではじめる。

以下に示すのは、いずれも戯曲を小説化した英文原作である。これでもまだ不十分だろう。とりあえず入手した書物から検討する。出版年を限定して集めた。その全部が、林紓＋陳家麟が漢訳する際の底本となった可能性を持つ。

小説化本のいくつか――第１段階

底本探索は、原本を手元におかなければはじまらない。個人で収集するのには限度がある。少数しか入手できなかった。集めたいくつかの書籍を発行順に配列する。便宜的に１から７までの番号をふった。

結論から先にのべる。以下の７種類は、私が調査した結果、林訳の底本ではないことが判明した。これだけ集めるにも少なくない労力が必要とされる。せっかくだから、少し説明をしておきたい。

1　チャールズ・エイリアス Charles Alias（editor）編集 ＆ ハーバート・シドニー Herbert Sidney （illustrator）挿絵『青年向けシェイクスピアの風景 Scenes from Shakespeare for the Young』Ent．Sta．Hall，London，1885

「前言 Preface」は、ブランチャード E．L．Blanchard の執筆になる。大判。見開き左に作品要約をかかげ、右に彩色絵図を配置する。収録しているのは「ハムレット」など全14作品だ。ただし、梗概のみ。

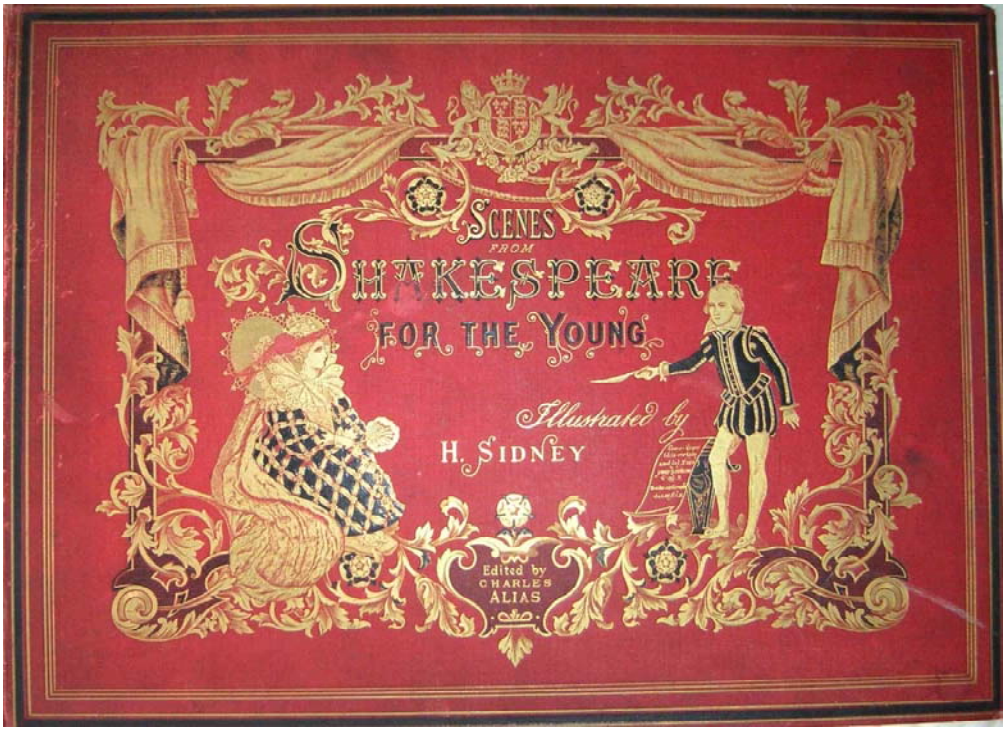
2　ハリソン・S・モリス Harrison S．Morris『シェイクスピア物語（All the）Tales from Shakespeare』J.B.Lippincott Company，Philadelphia，1896

“TWO VOLUMES IN ONE”と表示がある。ラム姉弟のものと合冊するアメリカ初版（1893）があるというが、未見。1912年の（ロンドン）William Heinemann 社版は、２冊本だ。第１冊がラム姉弟、第２冊がモリスの小説化作品を収録する。

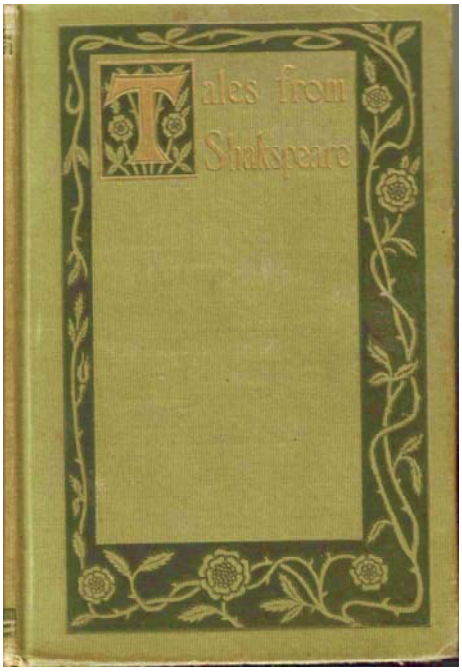
3　M・サーティーズ・タウンゼンド M．Surtees Townesend『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』Frederick Warne ＆ Co．and New York，1899

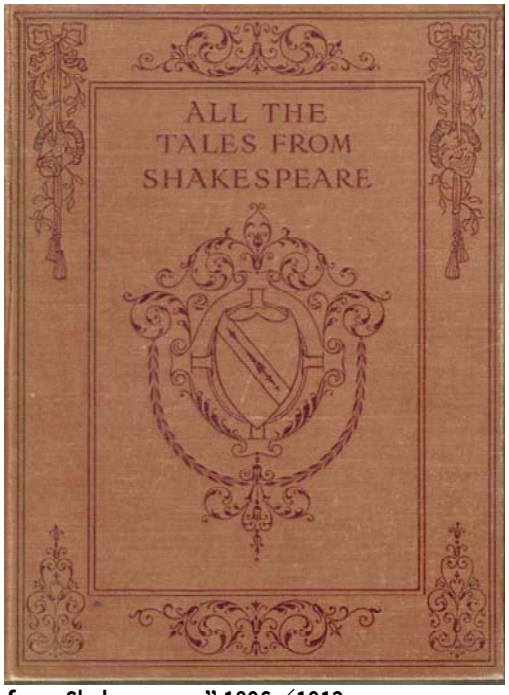
4　メアリ・マクラウド Mary Macleod『シェイクスピア物語 The Shakespeare Story-Book』1902

5　イーディス・ネズビット Edith Nesbit『20のシェイクスピア物語 Twenty Beautiful Stories From Shakespeare』D.E.Cunningham ＆ Co.，Chicago，1907

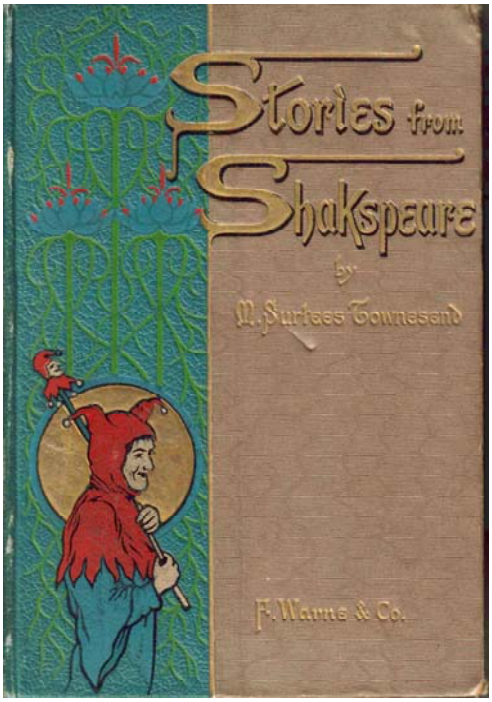


1：Alias“Scenes from Shakespeare for the Young”





2：Morris“(All the) Tales from Shakespeare”1896／1912



３：Townesend“Stories from Shakespeare”４：Macleod“The Shakespeare Story-Book”

同氏“Beautiful Stories From Shakespeare For Children”（1907）は未見。

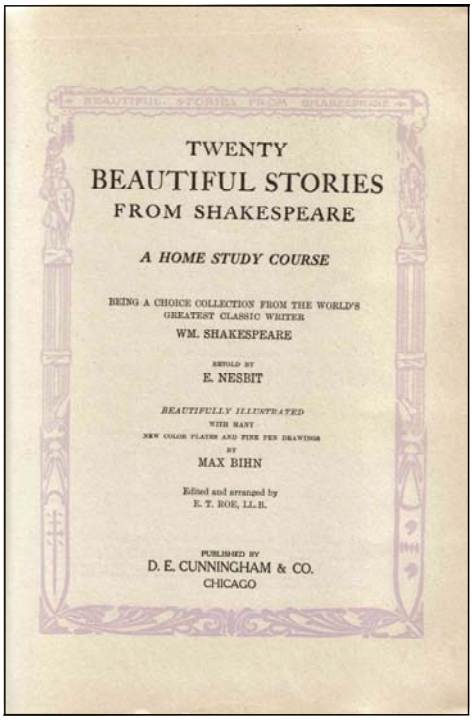
６　ジーニィ・ラング Jeanie Lang『児童向けシェイクスピア物語 Stories From Shakespeare，Told to the children』Thomas Nelson and Sons LTD，London and Edinburgh，1909

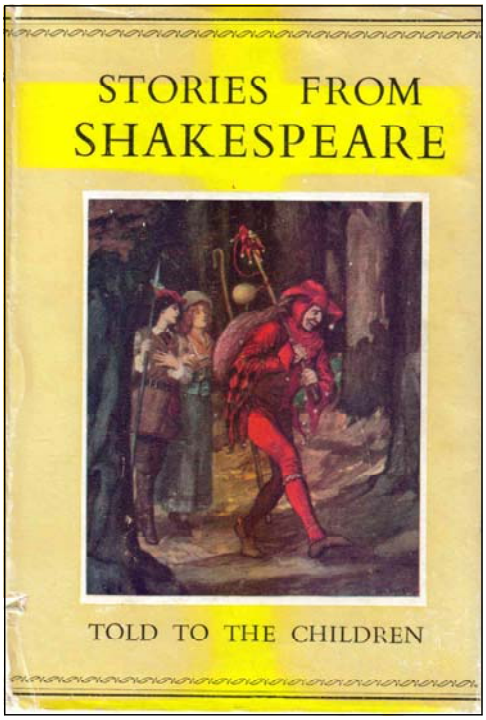
７　トーマス・カーター Thomas Carter『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』George G.Harrap，London，1911

書名を日本語になおせば、みな『シェイクスピア物語』になってしまう。英文の微妙な違いを書き分けるのはむつかしい。

別に掲げた一覧表１は、ラム姉弟『シェイクスピア物語』所収の作品だ。ラム以外の小説化本たちとどの作品で重複するのかを記入した。「澥外」は『澥外奇譚』（達文社　光緒二十九(1903)。書影による。澥は海の意）を示す。数字は、上記の各版本を意味する。x印は、該当版本に作品が収録されていないことを示す。

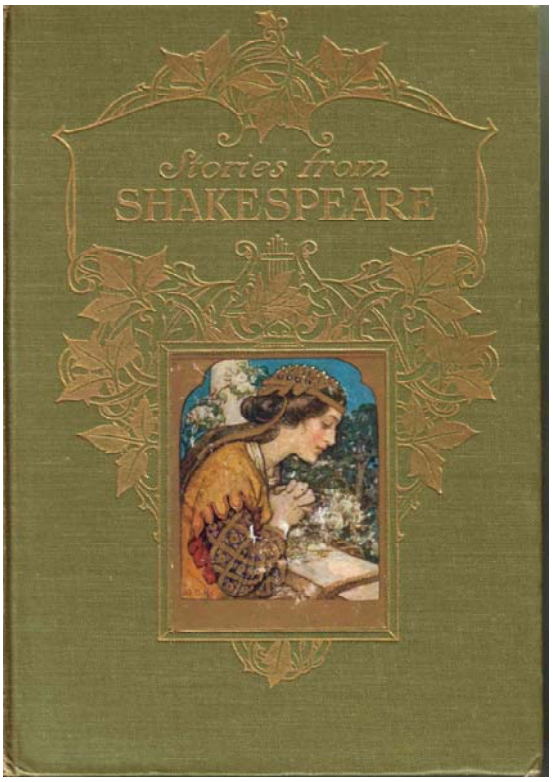
一覧表２は、本稿で問題にしている林訳シェイクスピア歴史劇と小説化本の対照をかかげる。





5：Nesbit“Twenty Beautiful Stories From Shakespeare”

6：Lang“Stories From Shakespeare, Told to the children”



7：Carter“Stories from Shakespeare”

一覧表１　ラム姉弟『シェイクスピア物語』作品対照表

作品の日本語訳は、チャールズ＋メアリ・ラム著、大場建治訳『シェイクスピア物語』（沖積舎2000.11.25）によった。ラム姉弟版を除いた諸版には、掲げた作品以外にも小説化したものがある。しかし、本稿には直接関係しないので該当しないものは記入していない。

The Tempest あらし
／1／x／3／4／5／6／7／8／9／ x／11
A Midsummer Night's Dream 真夏の夜の夢
／1／x／3／4／5／6／7／8／9／ x／11
The Winter's Tale 冬の夜ばなし
／瀣外／1／x／3／4／5／6／7／8／x／ x／11
Much Ado about Nothing から騒ぎ
／1／x／x／4／5／x／x／8／9／ x／11
As You Like It お気に召すまま
／1／x／3／4／5／6／7／8／x／ x／11
The Two Gentlemen of Verona ヴェローナの二紳士
／瀣外／x／x／x／4／5／x／x／8／x／ x／11
The Merchant of Venice ヴェニスの商人
／瀣外／1／x／3／4／5／6／7／8／9／ x／11
Cymbeline シンベリン
／瀣外／x／x／3／4／5／x／x／8／9／ x／11
King Lear リア王
／1／x／x／4／5／x／7／8／9／ x／11
Macbeth マクベス
／1／x／3／4／5／x／7／8／9／ x／11
All's Well that Ends Well 終わりよければすべてよし
／瀣外／x／x／x／x／5／x／x／8／x／ x／11
The Taming of the Shrew じゃじゃ馬ならし
／瀣外／x／x／x／4／5／6／x／8／x／ x／11
The Comedy of Errors まちがいの喜劇
／瀣外／1／x／x／4／5／x／7／8／x／ x／11
Measure for Measure 尺には尺を
／瀣外／x／x／x／x／5／x／x／8／x／ x／11
Twelfth Night; or，What you Will 十二夜
／瀣外／1／x／x／4／5／x／x／8／x／ x／11
Timon of Athens アテネのタイモン
／x／x／x／x／5／x／x／8／9／ x／11

Romeo and Juliet ロミオとジュリエット
／1／x／x／4／5／x／7／8／9／ x／11
Hamlet，Prince of Denmark ハムレット
／澥外／1／x／3／4／5／x／7／8／9／ x／11
Othello オセロー
／1／x／x／4／5／x／x／8／9／ x／11
Pericles，Prince of Tyre ペリクリーズ
／x／x／x／x／5／x／x／8／x／ x／11

一覧表２　林訳シェイクスピア歴史劇

Richard II リチャード２世[雷差得紀]
／x／2／x／x／x／x／x／8／x／10／11
Henry IV ヘンリー４世[亨利第四紀]
／x／2／3／x／x／x／x／8／x／10／11
Henry VI ヘンリー６世[亨利第六遺事]
／1／2／x／x／x／x／x／8／x／10／11
Julius Caesar ジュリアス・シーザー[凱徹遺事]
／x／2／x／x／x／x／7／8／9／10／11
【参考】
Henry Ⅴ ヘンリー５世[亨利第五紀]
／x／2／3／x／x／x／x／8／x／10／11

一覧表を見て次のことがわかる。

児童向け（といっても外国人にとっては一概に易しいというわけではない）に、複数の著者が原作を書きかえて小説化した作品は、ラム姉弟のものと重複することが多い。推察すると、ラム姉弟で有名になった作品について、後の著者たちが独自の筆で小説化することが流行した。

例外は、当然ながらある。ラム姉弟とは異なる作品を意識的に小説化しているものだ。「リチャード２世」ほかの歴史劇を対象とする。これらが、林紓の翻訳作品と共通している。だからこそ、その可能性を、今、私は追求しているのだ。

２のモリス版がさがしているものに該当する（らしい）。こちらは、さらに、ラム姉弟版と合冊にしている版本があることはすでに述べた。

原本を入手するまでは、私は、これに期待した。シェイクスピア作品を互いに補

うかたちになっているからだ。林紓がラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳して『吟辺燕語』を作ったのであれば、それと合訂してある別の作品に基づいてさらに漢語に翻訳した可能性が高いと考えた。まことに理解しやすいではないか。

理解しやすのは、確かにそうなのだ。ただし、説明のつかないことがある。『吟辺燕語』の発行が1904年であるにもかかわらず「雷差得紀」ほかの発表が1916年と遅れる。合冊になっているならば、林訳の公開は同時であってもいいはずだ。12年間の時間差を説明することができない。

原本が手元にとどく。原文を比較対照したところ林訳の底本ではなかった。そうやすやすとは問題解決にはいたらない。簡単なことならば、誰かほかの研究者が昔にやっている。

しかし、モリス版の存在は、ほかにも同類の書籍が出版されている可能性を示唆しているように私には思われた。さらに探索を続ける。

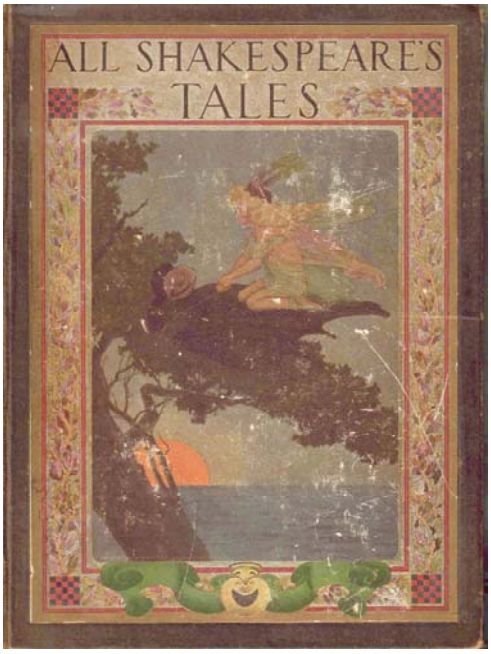
小説化本のいくつか――問題解決

調べてみると、シェイクスピア作品を児童向けに小説化する作家は、多数存在することがわかった。上記の著者たちを除いて、現代まで含めると、ざっと10人以上を数えることができる。実際は、この数倍もいるのではないか。ラム姉弟だけではなかったのだ。別のいい方をすれば、ラム姉弟が行なったと同様の試みは現在も継続されている。時間の推移により言葉づかいも変わってくる。新しい翻訳がたえず世に問われるはずである。

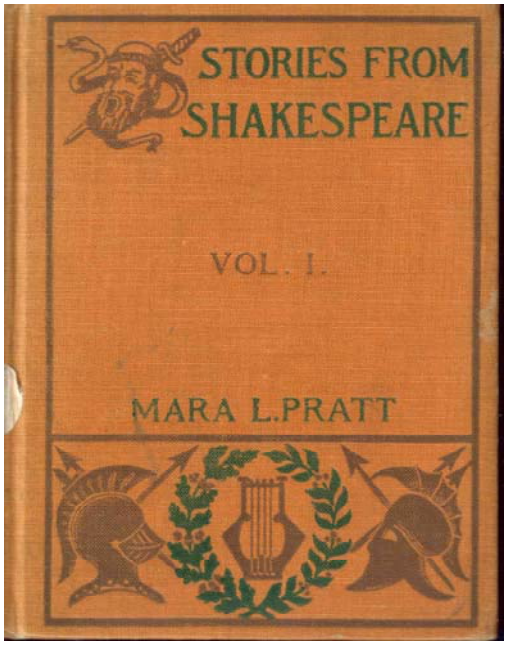
もうひとつ、シェイクスピアの小説化本は、どうやら図書館に所蔵されるというよりも人々のあいだに流通する性質のものらしい。なるほど、研究されない理由だろう。

林訳シェイクスピアの歴史劇が雑誌に掲載されるのは、1916年が主となる。ゆえに、英文原作はそれ以前に出版されていなければならない。必然的に数は限られてくる。とはいえ、改訳者の名前も、また書名も不明のままに探索するのは、まさに雲をつかむような話である。なんとか手元にたぐり寄せたのが、以下の小説化本だ。番号を上から継続させて示す。

8　ウィンストン・ストークス Winston　Stokes『全シェイクスピア物語 All Shakespeare's Tales』Frederick.A.Stokes Company，New York，1911



８：Stokes“All Shakespeare's Tales”



９：Pratt“Stories from Shakespeare”

扉には TALES FROM SHAKESPEARE BY CHARLES AND MARY LAMB ／AND ／TALES FROM SHAKESPEARE BY WINSTON STOKES とある。色彩挿絵は、カーク Maria L.Kirk だ。前半はラム姉弟版そのままを、後半にストークスのものを収録している。両者ともに「シェイクスピア物語」と称し、それを合訂させているから「全シェイクスピア物語」となる。

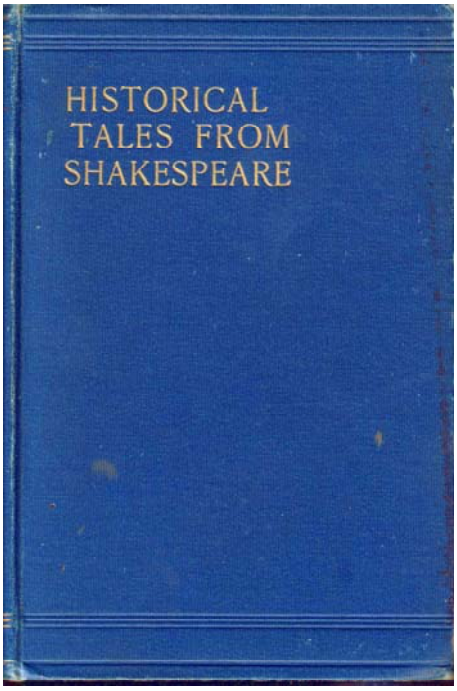
ストークスも、モリスとおなじく歴史劇を小説化する（一覧表に数字８で示した）。両者は独自に小説化しているから、それぞれの英文は、当然のことながら異なる。林訳と見比べると、こちらも底本ではないことがわかった。

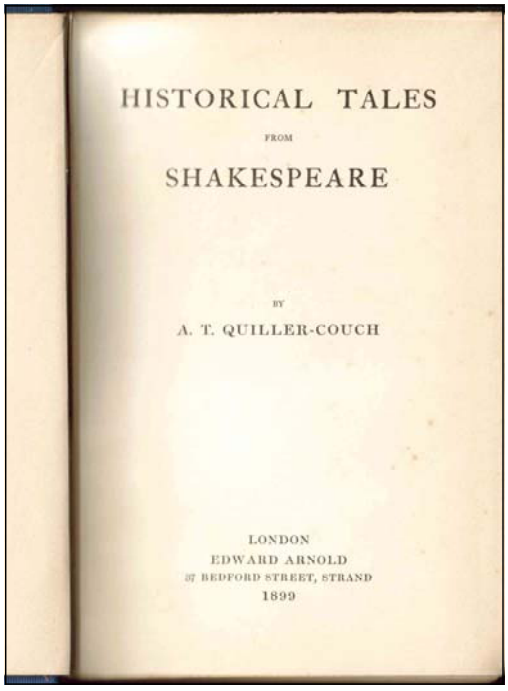
９　マラ・ルイス・プラット Mara Louise Pratt『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』vol.Ⅰ, Educational Publishing Company, Boston, 1890／vol.Ⅱ,1891

第３冊まで出版されているらしい。第１、２冊を見た。これに収録されているジュリアス・シーザーは、林訳の底本ではない。

いま、私は、探索した順序にしたがって紹介している。的は絞られてきているといえるだろう。

10　A・T・クイラー＝クーチ A.T.Quiller-Couch『シェイクスピア歴史物語





10初版：Quiller-Couch“Historical Tales From Shakespeare”1899

Historical Tales From Shakespeare』Edward Arnold，London，1899

こちらには、重版がある。Charles Scribner's Sons，New York，1900 だ。ふたつともに書影を掲げる。説明は、初版にもとづいて行なう。

著者の名前は、Arthur Thomas Quiller-Couch という。

序文（PREFACE）が６頁、本文は附録を含めて368頁である。巻末には書店の広告が32頁もついている（重版はクイラー=クーチが「Q」の署名で発表した小説の広告）。

収録作品は以下のとおり。林訳と重なるものに◎印をつける。（一覧表２には、番号「10」を記入した）

Coriolanus コリオレイナス pp.1-37

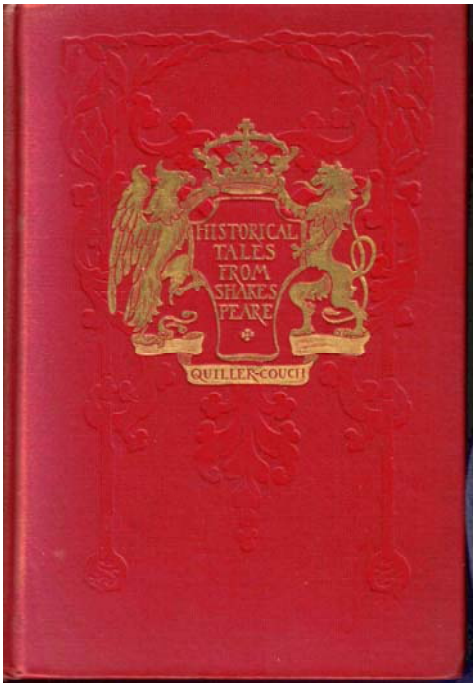
◎Julius Caesar ジュリアス・シーザー pp.38-77（注：原文はCæsar）

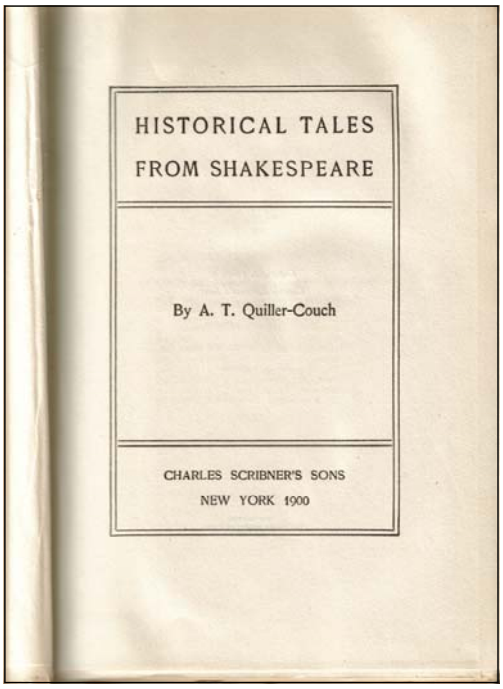
King John ジョン王 pp.78-104

◎King Richard the Second リチャード２世 pp.105-134

◎King Henry the Fourth ヘンリー４世 pp.135-218

◎King Henry the Fifth ヘンリー５世 pp.219-256




HISTORICAL TALES
FROM SHAKESPEARE

By A. T. Quiller-Couch

CHARLES SCRIBNER'S SONS
NEW YORK 1900

10重版：Quiller-Couch "Historical Tales From Shakespeare" 1900

◎King Henry the Sixth ヘンリー６世 pp.257-312
King Richard the Third リチャード３世 pp.313-364
Appendix pp.365-368

「ジュリアス・シーザー」の冒頭部分を引用して日本語をつける。これと比較対照するために、林訳をふたたび示す。

Four hundred and fifty years had passed and the Rome of Coriolanus had become the mistress of the world. But all these years had not healed the quarrel between the patricians and plebeians; for as the city increased in size and dignity and empire, so her citizens increased in numbers and grew less and less inclined to submit to the rule of a few noble and privileged families. p.38

450年が経過し、コリオレイナス（注：紀元前ローマの伝説的勇士）のローマは世界の覇者となった。しかし、それらの年月は貴族と平民のあいだの紛争をなくすことはなかった。なぜなら帝国が領土と威厳を増すにつれ、市民は数を増

加させて、だんだんと少数の特権階級に服従したくなる気持ちを減少させたからである。

【林訳】羅馬立国。可四百五十年。此四百五十年中。幾欲一統欧西。可云盛矣。惟貴族平民之乖忤。終未臻於和平。以羅馬発祥。特一小城。已而統撮全欧。拓地既広。殖民亦衆。民衆則智識日諳。意気激昂。万不能屈服於貴顕大臣之下。1頁

ローマが建国してまさに450年になる。この450年間にヨーロッパを統一しようと旺盛であるといえる。ただ、貴族と平民が離反し、平和状態にはいたっていない。ローマは、特に小さな都市から発祥し全ヨーロッパを統一してしまった。領土の拡張はひろく、殖民も増加した。そのため、民衆は日々知識にたけてきており意気は軒昂にして、高位高官重臣に決して屈服しようとはしなかった。

林訳は、英文原作に一字一句が忠実であるわけではない。だが、原文の意味するところを基本において十分にすくい取っている。

そのほか、「リチャード２世」「ヘンリー４世」「ヘンリー６世」などの林訳もクイラー＝クーチ版によっていることを確認した。

ここで結論である。林訳シェイクスピア歴史劇の底本は、クイラー＝クーチの小説化本であると断定する。

クイラー=クーチについて

底本がクイラー＝クーチ版だとわかると、周囲の状況が変わってくる。つまり、彼についての事柄を探索することができるようになったという意味だ。

『研究社シェイクスピア辞典』には、「クウィラ＝クーチ」の項目（193頁）で、『集英社世界文学大事典』第１巻には、「クィラー＝クーチ」（856頁）で紹介がある。『シェイクスピア大辞典』では項目を立てない。

それらによると、クイラー＝クーチ（1863-1944）は、オックスフォード大学卒業後、故郷で小説、詩などを発表していた。1912年、ケンブリッジ大学の初代英文学教授に就任する。筆名Ｑを使用する小説家でもあり、ドーヴァー・ウィルソンとともに第２ケンブリッジ版シェイクスピアの監修にあたったともある。シェイクスピア研究の専門家だとわかるのだ。だが、辞典の説明では、シェイクスピアの歴史劇

を改編のうえ小説化していることへの言及がない。彼の生涯においては、記述を省略してもいい事柄であるらしい。

ただし、児童文学ではあつかいが異なる。

ハンフリー・カーペンター、マリ・プリチャード著、神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』（原書房1999.2.10／1999.3.3第二刷）には、「クイラー＝クーチ，アーサー（・トマス）」（217頁）の項目がある。こちらにもシェイクスピア作品には言及がない。あつかいが異なると私がいうのは、別項目に「シェイクスピア劇」（316-317頁）があって詳しいからだ。児童のために再話された作品として、以下の名前をあげている。関係のありそうな名前だけを抜き出す。

ウィリアム・ドッド（1752年版）、エンフィールド（1774年版）、ラム姉弟（1807年版）、トマス・バウドラー（1818年版）、メアリ・カウデン・クラーク（1850-2年版）、メアリ・シーモア（1883年版）、Ｅ・ネズビット（1897年版）、メアリ・マクラウド（1902年版）など。ここに「アーサー・クイラー・クーチ卿の『シェイクスピアの歴史物語』（*Historical Tales from Shakespeare*, 1899）は、ラム姉弟が省いた数作の歴史劇の再話を収めている」（316頁）と説明がある。

いま、クイラー＝クーチだとわかっているから納得のいく記述だと思う。最初にこの解説を読んでいれば、一直線にクイラー＝クーチにたどり着いていたかというと、やはり、そうはいかなかっただろう。ラム姉弟以外に多くの小説化本が出版されているのが明らかだからだ。

クイラー＝クーチ版原文の一部が日本語注釈付で出版されている*15。

中国の『莎士比亜大辞典』には、「奎勒庫奇爵士」という表記で記載される（842-843頁）。サーの称号を持つから「爵士」である。辞書だから詳細な記述がないのもしかたがない。ただ、この辞典は、クイラー＝クーチの歴史劇が漢訳されていることを述べているのが役立つ（1349-1350頁）。湯真訳『莎士比亜歴史劇故事集』（中国青年出版社1981）である。説明によると、クイラー＝クーチが改編したシェイクスピアの歴史劇は、ラム姉弟版の姉妹編だと称されているという。残念ながら、それだけの説明しかしない。林訳についての言及はないのだ。辞典の執筆者は、重要な事実を見逃したらしい。それとも、湯真の方か。

クイラー＝クーチ版を翻訳した湯真の説明をさがしだして読む。

「訳者前言」には、クイラー＝クーチの略歴について、また彼が書きかえたシェイクスピアの歴史劇について解説している。その最後部分に、蕭乾より原書を贈ら

れた*16としるす。

蕭乾は、ラム姉弟の原作を漢訳しているのだ。（英）査爾斯・蘭姆、瑪麗・蘭姆改写、蕭乾訳『莎士比亜戯劇故事集』（原名『莎士比亜故事集』1956.7初版未見。西安・太白文藝出版社2005.1）がある。蕭乾は、その「訳者前言」でラム姉弟の物語につづいてクイラー＝クーチが歴史劇を物語にした、と説明する。これが、湯真に贈られた原本だろう。

以上を見ると、蕭乾も湯真も、驚いたことに、林紓の翻訳にはまったく言及しない。つまり、ふたりとも、林訳がクイラー＝クーチ版にもとづいているとは夢にも思わなかったのだろう。林紓はシェイクスピアの歴史劇から直接小説に変形させた、というのが定説だ。この定説のために彼らの思考が束縛されていたと考えられる。

クイラー＝クーチ版を所有していた、あるいはそれを翻訳した人でさえ、林訳との関係には気づかなかったことになる。それほど林訳にまつわる定説は強固で揺るぎないものだった。

結論を出したところで版本を追加するというのも具合が悪い。悪いが、別の版本も入手するよう努力しました、ということで説明しておく。

11　クレイトン・エドワーズ Clayton Edwards『全シェイクスピア物語 All Shakespeare's Tales』The Hampton Publishing Company，New York，1911

こちらも前半がラム姉弟版で、後半がエドワーズ版だ。色彩挿絵もカークである。

表紙を見て奇妙な感じを受けた。どこかで見たことがある。よく見なくてもわかる。８のストークス版と本文の頁数まで同じだ。表紙絵、判型もまったく同じ。表紙をくるむ布色、色彩挿絵の数と配置頁が違うだけ。

扉のうらに“Copyright，MCMXI，by／ Frederick.A.Stokes Company”とある。８のストークス版をもとに焼き直したものか。本文が同じなのだから、エドワーズはストークスの変名なのだろうか。詳細は不明だ。

4　結　論

版本の追加説明で本稿最後の締めがゆるくなってしまった。追跡の過程を時間順にのべた結果である。

林訳シェイクスピア歴史劇の底本は、クイラー＝クーチの小説化本『シェイクスピア歴史物語』だと再度確認しておきたい。この瞬間に、林訳についての鄭振鐸の

批判は、事実無根であると判明する。定説そのものが、林訳シェイクスピア冤罪事件であったのだ。

林紓＋陳家麟は、小説化された英文原作にもとづき漢訳した。だが、その書きかえた人物の名前を明らかにしなかった。単にシェイクスピア原著と表記したのは、林紓の間違いになるのだろうか。

もし、林紓の間違いであると主張する研究者がいれば、以下の魯迅も間違いであったと批判してほしい。

（法）囂俄著、庚辰（魯迅）訳「哀塵」『浙江潮』第５期　光緒29.5.20(1903.6.15)

ユゴー Victor Hugo 著だが、魯迅がよったのは、ウヰクトル、ユーゴー著、森田文蔵訳「フハンティーンFantineのもと（一千八百四十一年）」である。

（美(ママ)）培倫著、中国教育普及社（魯迅）訳印『（科学小説）月界旅行』東京・進化社　光緒二十九年十月(1903)

原作は、ジュール・ヴェルヌ Jules Verne “ DE LA TERRE A LA LUNE ” 1865 だ。魯迅が底本としたのは、井上勤訳『（九十七時二十分間）月世界旅行』（三木佐助発行1886.9）である。

（英(ママ)）威男著、之江索子（魯迅）訳「地底旅行」『浙江潮』第10期　光緒二十九年十月二十日(1903.12.8)

同じく、ヴェルヌの “ VOYAGE AU CENTRE DE LA TERRE ” 1864 だ。三木愛花、高須治助訳『拍案驚奇　地底旅行』（九春社1885.2）によって魯迅は漢訳した。

魯迅の漢訳は日本語にもとづいているが、彼はそれを明記していない。

「莎士比［シェイクスピア］原著、奎勒庫奇［クイラー＝クーチ］改写、林紓、陳家麟同訳」と書けば、より正確だったということはできる。だが、現在から見れば、という話だ。しかし、当時、林紓らは、そのように表記しなかった。それだけのことにすぎない。

林紓＋陳家麟が、クイラー＝クーチ版シェイクスピアにもとづいて漢訳したのであれば、勝手に小説化したといういままでの批判は、根本から成立しない。だから、冤罪だというのだ。私はこれを「林訳シェイクスピア冤罪事件」だと命名する。冤罪なのだから林紓＋陳家麟には責任の発生する余地がない。

冤罪事件になったのは、それを誘導した人物がいたからだ。

最初は、劉半農だ。それを追認した胡適にも責任がないわけではない。

だが、最大の責任者は、「ヘンリー４世」などの作品名を具体的に掲げて批判した鄭振鐸ということになる。今後、鄭振鐸は、林紓に無実の罪をきせた責任を追及されることになろう。

研究者たちの過去の記述については、すでに十分すぎるほど紹介した。多くの研究者が、シェイクスピア原作を小説化したことが林訳の欠陥だ、と指摘しつづけ、批判し続けてきた。定説を踏襲し、それをくりかえすことによってさらに強化し、長年にわたってあきもせず林紓を罵倒してきた。林訳についての最終的な評価をたとえ正にしようとも、翻訳に欠陥があると書くことは、林紓に対しての大きな罵りになる。だが、林紓が反論してくる心配はまったくなかった。また、ほかの研究者から批判されることもない。先行論文のどれもが、説明不要の定説だと認定している。だから誤っているはずがない。例外はない。自分がそれに追随してどこが悪いか。研究者自身は絶対的安全地帯に身を置きながら、林紓に濡れ衣を着せつづけ、林紓をむち打つ行列に心おきなく並んだというわけだ。ゆえに、私はこれを「林紓を罵る快楽」と称するのである。

林訳シェイクスピア歴史劇については、小説化という行為そのものが林紓＋陳家麟には存在しなかった。根拠がないのだから、林訳に向けられた批判は成立しない。加えるに、理由のない批判が長い期間にわたって継続され、これに加担した研究者は多数にのぼる。

事実無根、長期間、大規模というみっつの理由から見ても、これは、中国翻訳研究史上まれに見る一大冤罪事件なのである。

まさか、林紓＋陳家麟の冤罪を、しかも日本において晴らすことができようとは、私は想像したこともない。

林紓生誕の1852年から数えて155年目、1916年シェイクスピア歴史劇クイラー＝クーチ版小説化本の林訳発表から91年目、1924年の林紓逝去、鄭振鐸の論文から83年目にあたる。私は林紓にむけてグラスを挙げ、無言で冷たいカルピスを口にしたのだった。

【注】

１）林薇『百年沈浮――林紓研究綜述』天津教育出版社1990.10。166-167頁

２）林薇『百年沈浮――林紓研究綜述』196-197頁

3）樽本「林紓を罵る快楽（２）」『清末小説』第28号2006.12.1

4）リライト rewrite、リテル retell などという。日本語では、改作、書き直し、書きかえ、再話（児童向けにわかりやすく書き直すこと）などのことばを当てる。リライトとそのままいうばあいもある。また、原作を書き直す、の変形として翻案、要約（ダイジェスト）といってもいいかもしれない。ただ、本稿では、戯曲を小説に書きかえたという意味に限定して「小説化」を使う。ノベライズ novelize ということだ。

5）銭鍾書「林紓的翻訳」に言及がある。銭鍾書等『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981.11。42-43頁。なお、銭鍾書『七綴集（修訂本）』（上海古籍出版社1985.12初版未見／1996.2第4次印刷）所収の該文とは、文章と注の一部が異なる（98-99頁）。

6）胡適は、ここで林紓を大罪人にしてしまったが、５年後の評価はといえば、正の方面に重点を移した。「彼（注：林紓）の大きな欠陥は原文を読むことができないというところにあった。しかし、彼は結局のところ、少しばかり文学的天才のある人であった。ゆえに、もしよい助手がいれば、彼の原書を理解する文学趣味は、原文をおおざっぱにしか読むことのできない現在の多くの人たちにくらべても、往々にしてとても高かった。現在、多くの人は原書について完全に理解しているとはいえないばかりか、彼らの白話を運用する能力はまた林紓が古文を運用する能力に遠く及ばないのだ。彼らも林訳を批判するというのであれば、それは林紓に罪をなすりつけることになる」（胡適「五十年来中国之文学」『最近之五十年』上海・申報社1923.2初版／上海書店影印1987.3（出版説明に1922年２月初版本とあるが1923年の誤り）また、『晩清五十年来之中国』と改題影印した香港・龍門書店（＜1922年上海初版とする＞1968.9再版）本がある。6頁）。大罪人発言については、胡適はすっかり忘れてしまったらしい。

7）鄭振鐸「清末翻訳小説対新文学的影響」『今代文藝』第１号1936.7.20。116頁

8）樽本「『漢訳東西洋文学作品編目』とその編者」『清末小説から』第80号2006.1.1。

9）この部分は引用符をつけていない。ところが、あたかも林紓「小説雑考」からのように文章名を明記している。林紓の該文を読んでも該当する部分はない。謝飄雲の意図が不明だ。

10）相浦杲『考証・比較・鑑賞――二十世紀中国文学研究論集』（北京大学出版社1996.8）には該論文を全文は翻訳収録していない。該当部分は、未訳である。

11）瀬戸宏『中国話劇成立史研究』（東方書店2005.2.25。127頁）でも間違ったままだ。

12）未見。孟兆臣『中国近代小報史』北京・社会科学文献出版社2005.10。284頁
13）William Shakespeare, Wells and Taylor(ed.)“THE COMPLETE WORKS”, Oxford University Press. 1988。601頁。日本語訳は、次のものによった。シェークスピア著、坪内逍遥訳「ヂューリヤス・シーザー」『ザ・シェークスピア』第三書館2002.8.15。697頁。くり返し記号は文字になおす。
14）村岡勇訳『シェイクスピア物語』角川文庫1952.7.30／1966.8.30二十四版。398-399頁
15）長澤英一郎注釈『ジューリアス・シーザー物語』研究社印刷株式会社1950.6.25 研究社小英文叢書67
16）奎勒-庫奇改写、湯真訳『莎士比亜歴史劇故事集』北京・中国青年出版社1981.3。8頁

【附記】本稿は、2006、2007年度大阪経済大学特別研究費による成果の一部である。

（たるもと　てるお）

『清末小説から』第84号　2007.1.1

魯迅「出乎意表之外」の意表外 ……樽本照雄
出版社の図書目録 ……神田一三
晩清小説作者掃描（玖）……武　禧

『清末小説から』第85号　2007.4.1

林訳シェイクスピア冤罪事件（要旨） ……樽本照雄
林訳小説評価の最近 ……樽本照雄
樽本論文補遺３題 ……沢本香子
『漢訳ホームズ論集』……樽本照雄
晩清小説作者掃描（拾）……武　禧

http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto

『清末小説から』は、清末小説研究会のウェブサイトで公開しています